大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可 （毎月一回一日發行） 昭和五年八月十八日印刷納本 同五年九月一日發行 第八卷第七號

婦人運動

九月號

第8巻 第7號

職業婦人社發行

健康躍進の
季に入る……

午前と午後に——
御子様に御與へになる
ハーモニカ・チヨコレートが
御子様の秋の健康に
どれだけ必要であるか
賢明なお母様は御存じのはずです。

御子様向きの

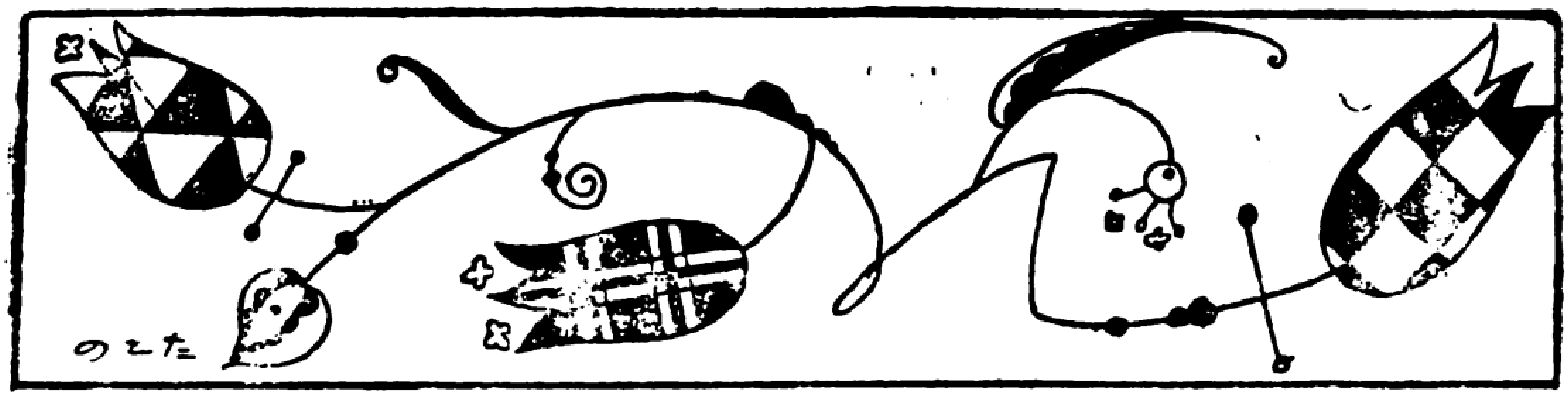
森永ハーモニカチヨコレート

一個十錢





H—K



婦人運動（八、九月合併號）

劇の話

讀者欄



行路三篇

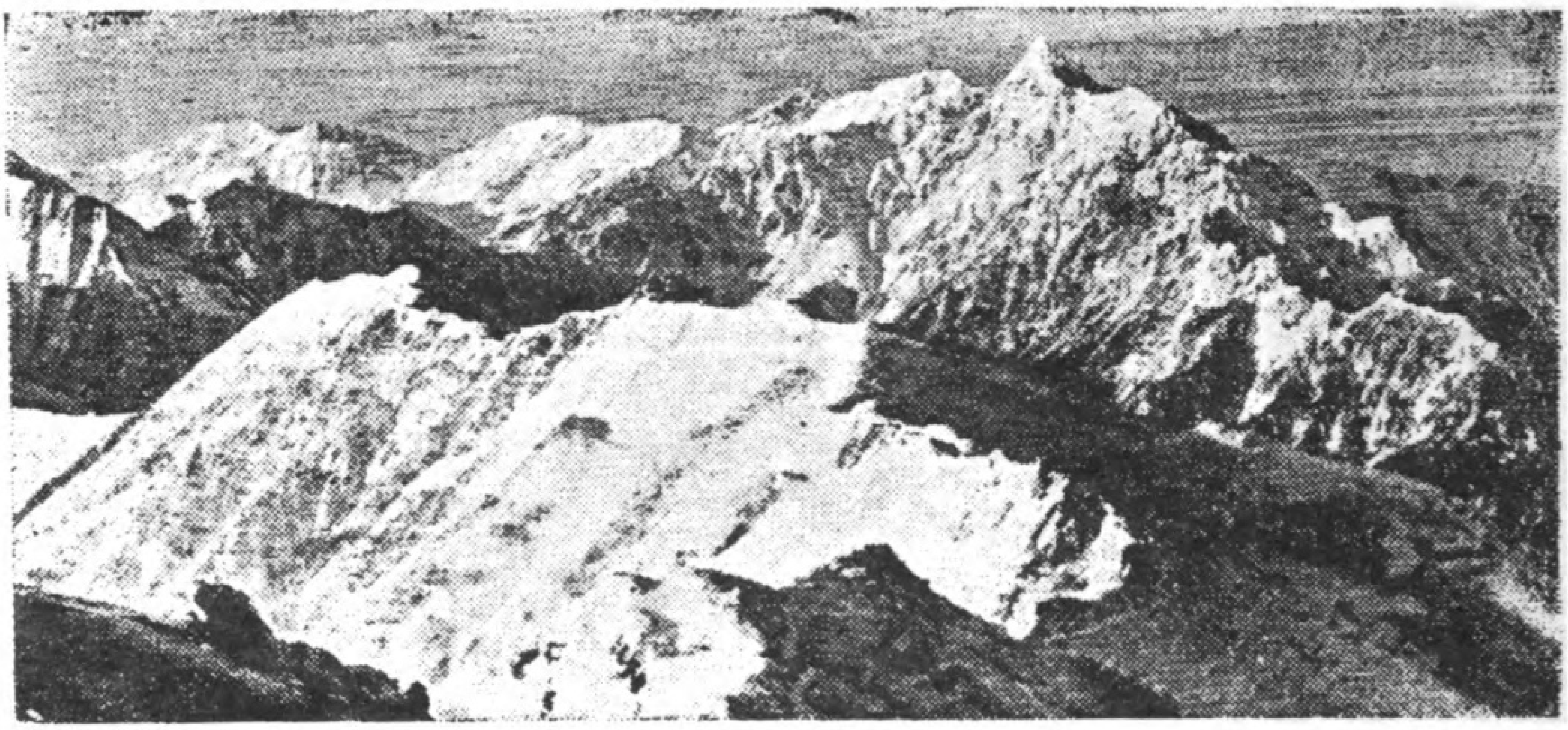
中川一政

所信（一九一六年頃）

父母はあはれ
老いゆくなり
憂慮と焦心と
余が身の上にかけて
されど神よ
逢はしめよ
われら死したる後の世に
われ輝かに父母のみまへに
俯仰はぢざる我は子なりと。

托レ思（一九二五年頃）

人は誰か思ふぞ



わが子死すと。
病める子の枕邊にありて
此子死すべしと
云ひ得るは他人なり
死なねばならぬ子をでも
死すと思はぬは親なり
愛すればこれ生くと思ひ
愛さねばこれ死すと思ふ。
わが友よ
わが爲す事も。

自負（一九三〇年頃）

われは石也
道に落ちたる石也
人、手にとれば玉となり
人、手にとらざれば唯の石に過ぎず。
われは石になりてゐて嬉しかりけり
人のひろひて玉となるまで。



野の雑感

淡谷悠蔵

林檎の袋掛がやつと終へた。林檎の袋掛をして居る間にどこもかもすつかり雑草におほはれて了つて居る。今年は雨が多いので、殊に雑草の伸びがよい。

雑草の中から陸稲を、西瓜を、甜瓜を、救ひ出してやらねばならない。作物の根と雑草の根とが地の中でからみ合つて容易に抜けて來ない。無理に引き抜かうとすると作物まで抜けて來る。

林檎の袋掛の終る頃、聞えて居た村のさなぶり（田植を了へた祝ひ）の太鼓もゝう聞えない。どこでもまた田の草取り、畑の草取りに忙しくなつたのだ。

村を半里程離れた谷間の私の畑から、徑を丘にのぼると、緑色の薄絹を張たつやうな田圃が見渡される。田圃は一里程ある海岸の村までつゞいて居る。

丘の上には、いつも風がある。私はくたびれるといつもその丘の上にのぼつて休むことにして居る。汗に塗れた肌に、海峡を吹き渡つて來る風を入れ乍ら、丘の麓の白樺の白い木肌を眺め、蒼い海を越えて行く、小さな汽船を眺めて居る。

何といふ寂寥だ。何處にも人影が見えない。丘の上には小さな夏の野の草が、なよ〳〵と黄色な花をゆれさせて居るばかりである。

生きて行くことの七面倒臭さは、人間に、手つ取り早く大地に米をつくつて食ふことの單純さを憬れさすものである。一人の人間が一年に食ふ米は五俵もあれば澤山である。五俵

の米をつくるに要する田圃は一反歩、一反歩の田圃は一人の勞力にたやすい廣さである。

百姓はたやすく生きて行けさうなものである。それで居て決してたやすく生きて行つては居ない。



漁師にとつて海が墓場であるやうに、百姓には田や畑が墓場である。

ある百姓は、田を打つて居て、むかふの畔まで打つて、行つたところで、ぽつくりと倒れてそのまゝ死んだ。その百姓は七十を越えて居た。あるおかみさんは、夕飯時になつても畑から歸つて來ないので、幼い娘が迎ひに行つて見ると、畑の中に鍬の柄に頭をのせて冷くなつて居た。足裏にぢり／＼と土がやけつく、八月の炎天である。

丘の上に眺める靜かな緑の風景の中に、かうした悲劇が孕まれて居る。こゝでも人生は烈しい戰である。緑の薄絹を張つたやうに見える美しい田圃も、その泥は湯のやうに沸いて、腰を折り曲げて、幾日も幾日も草取りにその中に立ちつくす娘達の青春を食ふ齒車である。

雪が消える前からの烈しい勞働は、夏の酷暑と眠り不足とを加へて百姓達の頬の肉をげつそりと削り取る。

手つ取り早く大地から米をとつて食ふ生き方——それ丈の生き方が、これ程までに烈しい戰を要求するといふことは、一つの悲慘である。

私は去年の秋、他人の畑に忍び入つて玉菜を盗んだ女が、玉菜を抱へたまゝ、畝の間にのめつて死んで居るのを見た。霜の降つた朝だつた。女は數人の子供を抱へたやもめで、苦しい持病があつたのだ。見に集つた村の人達は、その女をさげすむといふよりは、苦しい日付をして居た。

百姓達の烈しい勞働は、自分達の食ふ米の幾倍もの米をつくり出して居る。自分達の食べる野菜の幾百倍の野菜をつく

り出して居る。しかもこの餘分の生産物は、ほんの少しばかりの金にかへられるばかりである。

「百姓がどうしても、その生産物を安い金と引き換へねばならぬ必要は何々だらう」といふ話をした。

一、税金、二、醫療、三、教育

百姓が目に見えて生産物を奪ひとられるものは、税金と小作料、そのあとは、賣つたり、買つたりして居るうちに、こつそり掠めとられて居るのだ。

考へて見ると、百姓に、金を欲しがらせるたくらみは相當に深く、相當に根強い。ある時は權力をもつて、ある時は誘惑をもつて――。

私は毎年六七百箱の林檎と、五百貫程の水蜜桃をつくり出して來た。四五反歩の花畑には春から秋まで、いろ〳〵な花が咲き溢れてゐる。林檎は毎日一つ宛食べて、二百人の人が一年中食へる數だ　水蜜桃は三十人の人が一年中一つ宛食へる數だ。花は恐らく二百人程の人達の室を飾つて不足はないであらう。それで居て、私の生活は一月數冊の本を買ふことの外には町の生活から大してお蔭を蒙むることが出來ない。

都會の人達は百姓無しでは絶對に生活し得ないが、百姓達は都會無しで、今のまゝの暮しなら結構やつて行ける。都會は、農村に、その派手な生活を見せびらかす。その誘惑で農村の生産物を釣つて行く。しかも決して農村にはその代償を正しく支拂はないのだ。私は文明國の人間が野蠻國の人間になしたやうに、つまらないブリキ細工で、大切な生産物を釣る藝當を日毎、私の周圍にも見る。

金を!!　金を!!　金を!!

その叫びは農村にも上つて居る。青森が近い私の村でも、朝毎に澤山の人が、野菜や草花を洪水のやうに町に送り込む。それが何處へ消えるか、農村には、只荒寥とした、苦惨な自然との闘が、今日もつゞけられて居るばかりである。

都會に於けるやうに、農村に於いても、あらゆるものを、金をとほして得させやうとするところに、大きな搾取の力が働く。

私は今、更めて私の周圍を見直す氣持で居る。そしてそこに、金をとほすさきには、ちかに生活にとり入れられる豊富

な生産のあることに氣づく。

朝は、草に一杯の露である。山羊がしきりに草をねだつて居る。小さな池のほとりに据えた砥石に鎌をとぐ。池には蘆が生えて居る。水蓮がぽつかりと蔭を落して居る。生れたばかりの小さな目高が澤山泳いで居る。

小さなバケツに山羊の乳を搾る。泡立つ白い乳——

鷄が十五羽——七面鳥を孵し、鷄の雛を孵し、それ等を林檎の樹の下の草原に放して飼つて居る。巣箱の中の眞白なあたゝかい卵。

兎が居る。犬が居る。猫が居る——。

麥秋である。一日、森閑とした麥畑で、さく／＼と麥を刈る。麥の莖は枯れると、白く透きとほつて來る。夕方になつて陽がその中に落ちる時、すく／＼と、すく／＼と細い透きとほつた莖の列が、穗をつけて搖れる。搖れる。

私は、かうして山の中の林檎畑の生活を小さくひとり守り育てゝ行かうといふのではない。窮迫した農村の生活を前にして、小さなユウトピアの夢に耽るのは一つの罪惡である。また私自身、ユウトピアの夢を物靜に樂しみ得た自分でもない。資本主義は明かに暴力になつた。それは金の力で、あらゆる生活を叩き潰さうとして居る。

私はその暴力に對して、決然と鬪ふ意志を持つ。不正な取引で、澤山の生産物をちよつぴりの金ですりかへる商人の手品、その金を無理矢理要求する暴力と斷然鬪ふ決意を持つ。農村の窮迫は百姓の一人々々が、見せびらかされる金にしがみつかうとして、夜の目も寢ずに人生を磨り減すことによつては、決して救はれない。勞働は生活の充實の爲にある。

無産階級の鬪は、黃金中心の思想に對する生活中心の思想の鬪でなければならない。私達はあり餘る生産の力をがつちりとこの思想の下に組織せねばならぬ。

林檎の葉は濃い綠である。月光と風がその上に氾濫して、波のやうにざはめいて居る。ロシヤ向日葵の花が火のやうにくるめく。

毎日、草取りだ。汗と埃とが、顏も手足も眞黑くする。背中がぢり／＼と焦げる。蚊がひどい。

私は勞働力の大きくなることをつとめる。暑さに耐へる力の強くなることを希ふ。
人生は勞働の上に築かれて本當のものだ。
たゞその勞働は搾取される爲のものでありたくない。
生産の力は、掠奪に抗する力をも兼ねなければ意義をなさない。



共働農園の記

安達五郎

東海道線を東京より下つて、車窓に富士山が見え出してから間もなく、裾野驛に着く。この驛で下車して再び富士の靈峰を見上ぐる時、富士の手前に黒くどつしりとした連山が見える。この山が愛鷹山で、この山の中腹に我等の生活團體である共働農園がある。裾野村は私達が遠くから送られて來る荷物を取りに、又色々の用事を足しに馬を索いては出て行く村で、この村から約二里、歩いて二時間はかゝらう。

働いて生活することを最も正しきと信ずるが故に、而して働く以上生活に不安なく、又萬人をして働き得る世の仕組を作らんが爲に、私達は其第一歩として此の農園を開拓しつゝあるのである。

ジャズに亂舞する紅燈の巷。其處に群り集る人人をよそに此れは又何んと云ふ原始的な生活であらう。複雜混沌たる生產、交換、消費の中にうごめいて居る都會人にとつて、此れは又何んと云ふ原理的な生活であらう。私達は與へられたる土地に對して最善と可能を前提として、生活に必要な食物を作り、家畜を飼育する。そして收穫された米を喰ひ、麥を喰ひ、玉蜀黍、芋ソバ等を喰ひ、家畜の生産物は主として賣却

して錢に換へる。簡單直裁的な自給自足の生活ではないか。
創業四年、未だ何一つ成りたるものなけれども、其當初岡本氏がこの山に向つて開墾の第一鍬を入れられるまでは、此處は峰や谷に點在する杉や檜や竹林の間に當地方特有のシノ竹が密生してゐて、澤には葛の葉が一面にはびこつてゐたものすごい處であつた。時折官林に通ふ役人や竹を刈る村人が山路に被ひかぶさつてゐる小竹を拂ひ乍ら、寂寞の山の晝を通つてゐた。岡本氏の不斷の努力は猪突の如く、杉の立木は切られて此處で製材して建築の用材となし、椚は炭に燒き、シノ竹は大鎌で刈り拂ひ、露れた地面をさくつて陸稻の種を蒔いた。

玉蜀黍をまいた。甘藷を植ゑた。そして畑にはそれぞれ、杉跡、クヌギ跡、カンバ跡など名前をつけた。かくて開墾地は次年三年に次第に增し、現在では約三町歩の畑を合理的に整地し、陸稻が一町歩、甘藷が六反、其の他玉蜀黍、大豆、ソバ、桑、野菜類が、農園者の手によつてすく〳〵と成長しつゝある。

開墾の作業は苦しかつた。だが勞働の喜びを今は知る。資本主義機構の中に於ける生產勞働に何等意義を認めることは出來ないが、勞働の神聖と正義の喜びを共働の仕事の中に自と感ずるのである。苦心して開墾された其の畑には、自然私達の愛が宿る。母親が自らの胎を痛めて產んだ子供のやうに私達は畑が可愛いのである。故に專心畑を瘠せさせない樣、肥えさせるやうに心懸ける。現今に於ける農村の疲弊は又畑の土の疲衰したことにもある。都會に住むブルジョアは、人造肥料會社を造つて農民のなけなしの財布から錢をしぼつて尙且つ畑から地力をも搾取してしまつたのである。一莖の草も生えない瘠せ衰へた土を私達は愛の土とは云はない。愛の土とは有機物を豐富に有ち濕ひあり、溫味ある黑い土のことである。この愛の土によつてこそ作物はすく〳〵と氣持よく成長してくれるのである。今年は陸稻の三十俵も穫れよう。そしたら芋などは家畜にやつて私達は充分に米が喰へる。收穫物を賣らずに穫つたものを喰ふ。生活の經濟を立てるとき農產物の暴落に懸念することもなく、純粹な心持で、物を育くむ心の喜びが味はれるのである。

よき作物は、よき土によつて成長し、よき土は家畜の糞によつて培はれる。都會で造る金肥は依然都會的であり、一瞬的であり、頽廢的である。そう云ふ肥料を私達は使ふことを

しない。出來る限り家畜を有効に澤山飼育して自給肥料を造ることに心懸ける。農園には牛が居る。馬もゐる。豚も、鶏もゐる。岡本氏が外へ傳唱に出懸けられる際にはいつも馬を肥やすやうに、奥さんには子供を泣かさぬ様にと云つて出て行かれる。

　農家にとつて家畜は大事だ。殊に今では馬が一番大切である。人間の一人位は風邪引いて寢ても、馬に一日寢られては大變の影響を蒙るのである。だから私達は馬を大事に飼ふ。大事にしてよく飼へば毛の艶良ろしく、尻は丸み、使へば活々と疲れ氣なくよく働いて呉れる。かうなると馬もほんとうに可愛くなるもので、仕事をしまへばあの長い顔に頬をすりつけて「有がたう。御苦勞様」と胸の奥から自然愛情が湧いて來るのである。一頭の牛は一日八貫の糞尿と新鮮な牛乳を私達の爲に生産し、豚は牛馬に劣らぬよい肥料を造つて呉れる。そして豚は寂しい時のよい友達である。都會人の書いたいゝ加減な著作を讀む時間があつたら、豚を眺めて居た方が増しだと思つてゐる。

　鶏は目下成鶏が百五十羽、勤勉にして元氣な鶏のなく音につれて、農園の朝は明けて行く。清澄な空氣の中へ、運動場に放つて粒餌をまけば、すばらしい勢で餌を拾ふ快活な姿よ。快活にして良く喰ふ鶏は私達の爲に多くの卵を産んで呉れるのである。その鶏をつかまえて見る、よく卵を産む鶏は人に抱かれゝば又何んとおとなしいことであらう。羽毛を撫でながら、そろつとお尻に指を觸れてみればもう卵が來てゐる。滿足な微笑が私の面に浮んで鶏に對する感謝と愛情の念が自づと湧いて來るのである。しかしよい鶏は可愛いが卵を産まない惡い鶏は一分間たりと飼つて置くさへ癪になる。そう云ふ鶏は見付け次第用捨なく引き拔いてつぶしに賣つてしまふ。働かずに食ふ不正な生活者であるからである。

　百姓をして居ると毎朝の糞掻きは又樂しみの一つである。鶏糞の肥料的價値は今更云ふまでもなく甚大なもので、一羽の鶏が一年一俵の肥を造る。かうして作物の肥料が自給肥料として全部出來るなら養蠶をやつても繭を賣つてとつた錢を肥料屋へ持つて行かずに濟んだなら、蠶を飼ふにも張合があると云ふものである。これからも鶏は次第に殖やすであらう。そして飼料は他から買はず自ら作つて鶏に與へる。かうした經濟によつて生産された卵は、當然安い値段で以つて都會の消費組合に送られるのである。

× × × × ×

自然に直接接して生活する者は自然の心をよく知る。一枚の枯葉は散つて詩の胸に感傷を與へて空しく消え果つるのではない。又生物の糞は價値なきものとして排泄し捨て去らるべきものでもない。自然の萬物は不滅にして常にめぐりて果つることなく糞は肥料となり作物によつて植物蛋白となり草食動物によつて動物蛋白ともなる。人は自らの生活の爲に作物を作り、食ひ、動物を飼育して食うて生きて行くのであつて、又それらの爲に生かされてゐるのである。

人は自らをよりよく生かさんが爲には他をよく生かさねばならない。資本主義は個人をのみよく生かすことによつて人類は向上發展するものであると云ふ誤つた見解をもつてゐる。とることのみを知つて、與へることを知らない資本主義的の經營は農業にしろ、工業にしろ商業にしろ行き詰りつゝある。

共働運動の前途には光明がある。この農園では五家族位の人員は生活出來よう。山に來ても共働すれば立派に生活出來ることを世間に示し、かうした團體を單位とした生活體の聯合を以つて社會を作り上げることに努力するのである。農村青年共働學校の第三回の卒業生を以つて伊豆伊東町郊外に吉田共働農場が開始された。私達は都會に於ける消費組合の發展を喜ぶと共に、私達は農村生活を共働組合によつて新生さすであらう。

新刊紹介

▲避姙の栞（平野書房版 定價八十錢）

本書はマリー・ストープスの「避姙の研究」中、醫學的に重要な部分と、社會的に興味あり且つ見逃す事の出來ぬ部分のみを馬島僴氏が抄譯されたもので、學問をする人にも一般の人々にも是非おすゝめしたい。

▲不滅の結婚愛（アルス版 定價一圓二十錢）

これもマリー・ストープスの著で馬島氏の譯、科學的な立場から、近代的な取扱ひをした性問題に關する極めて重要な文獻である。

▲性的解放時代（アルス版 定價一圓二十錢）

本書はカルヴアートン及びシユマルハウゼンの編輯する「文明に於ける性」の中から「性の批判的觀察」の一篇を譯出したもので筆者はそれらの部門の知識に於て權威のある人達であり、いづれも學術的資料に基いた叙述並に研究である。前述の二著と共に一讀をおすゝめする。

職業婦人に贈る

江口渙

現代のやうな資本主義制度の社會に於いては、職業婦人も亦、他の凡ての男子の勤勞生活者や俸給生活者や勞働者小作人と同じく、結局、一個の商品にすぎない。

たとへ、女教員であらうと、看護婦であらうと、タイピストであらうと、事務員であらうと、學校なり、病院なり、會社なり、官廳なりへつとめて、月々、報酬をもらふことは、各自の職業的技術技能を、月々、一定の金額で買ひ取つてもらつてゐるといふことなのだ。

相手の雇主は、自分に必要な間だけは、その持つてゐる資本で、金で、職業婦人の職業的技術を買ひ上げる。然し、不必要になれば、何時でも買ひ上げを中止する。即ち首をちよんぎつて解雇する。そして、その買ひ上、或は買ひ上げ中止は、即ち雇入、或は解雇は職業婦人の側からは全然自由にならなくつて、唯、雇主の側からばかり、實に自由勝手に行はれる。

一般の婦人達は、藝妓や娼妓や、淫賣婦達が、その肉體を金錢で賣つたり、買はれたりしてゐるのを見て、非常に輕蔑したり、いやがつたりする。

然し、金で賣つたり買はれたりするのは、單にこれ等の婦人ばかりではない。職業婦人も、矢張同じだ。唯、藝妓や、娼妓や、淫賣婦は、その肉體を賣り、職業婦人はその職業的技能を賣るといふだけの相違にすぎない。

つまり職業婦人と云ふものは、恒に雇主から人間としての取扱ひ、一個の獨立した人格としての取扱ひをうけてゐない。唯、一個の商品、金錢で買ひ取ることのできる商品としての取扱ひしかうけてゐない。人間として最も尊重されなければならない人格は恒に、全然無視され、蹂躙されてゐるのだ。

好く、私達はこんな言葉を聞かされる。やれ教育の仕事は神聖であるとか、だから教育家は階級を超越した非常に

神聖な任務を社會から與へられてゐるとか、或は病人を看護することは、神の使のする役目を果すことだとか、會社や銀行で一生懸命に働くことは、やがて國家のために働くことだとか、いろ〳〵なうまいことをいつてゐるのを聞く。然し、これは要するに口先でうまいことをいつて、職業婦人を煽て上げて、自分達へ都合の好いやうにこき使はうとするためのごまかしにすぎないのだ。

凡そ資本主義の社會にあつては、教育はみんな支配階級のための、資本家と地主のための教育なのだ。現代の支配階級である資本家や地主どもが、自分達のために、勞働者や農民やその他の無產階級を、どうすれば上手に服從させることが出來るか、どうすれば思ふやうにこき使つて、搾り取ることが出來るか、といふのが即ち現代の教育なのだ。そして、それに必要な人間を金で雇ひ、金で使ふのが現代の教育組織なのだ。

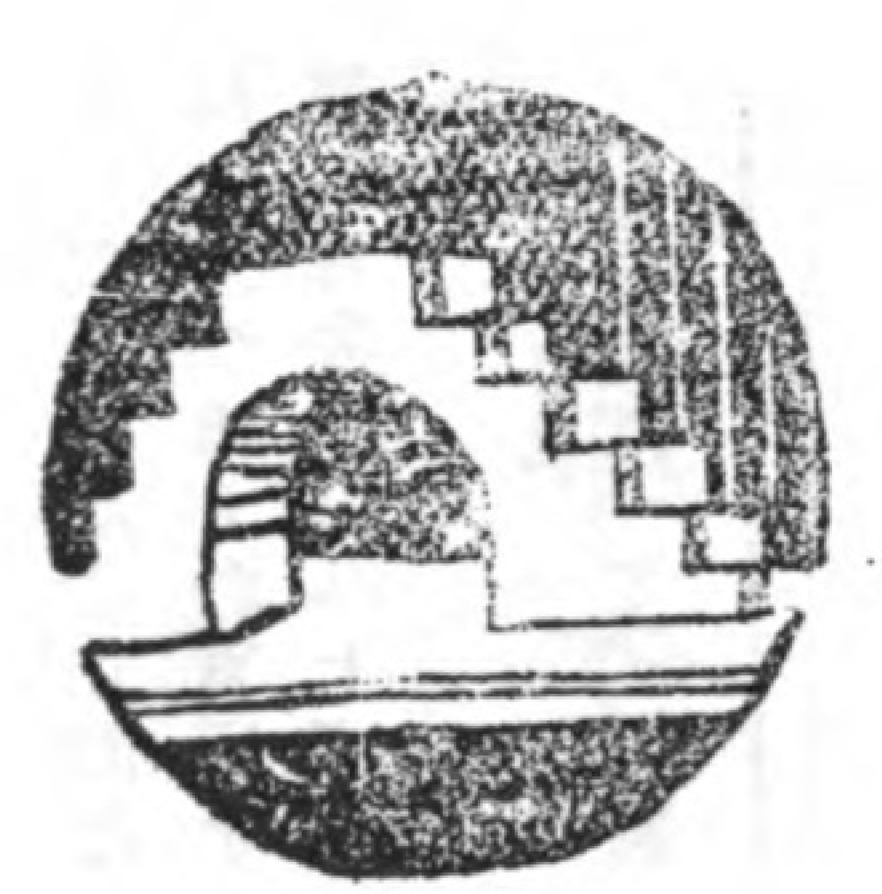
だから、支配階級に都合の惡い教育家は、それが教育家としてどんなに立派な人物でも、直ぐ首をちよん切つて終はふ。つまり教育家をすら、彼等は自分達のための道具、然かも金で買ひ上げることのできる道具としか考へてゐない。

看護婦だつて、女醫だつて、矢張同じことだ。どんな美名を冠してゐやうとも、現代の社會に於いて、病院は結局營利事業にすぎない。從つて病院の營利に不適當な看護婦や女醫は、その人が看護婦として、又は女醫として、どんなに優れた人物でも、すぐ首をちよんぎつてしまう。

銀行や會社や官廳だつて、矢張同じことだ。第一、無闇に國家、國家といふが、現代の國家、資本主義社會に於いて國家は、結局、現代の支配階級である資本家、地主といふ働かないで食つてゐる人間たちの國家であつて、勞働者、農民その他働いて食つてゐる者の國家ではない。

今やこの不合理に眼醒めたる全國の勞働者と、農民とは、同じく眼醒めたる勤勞生活者、俸給生活者と、相携へて、現代の資本主義的社會制度、資本家、地主獨裁の社會制度を建て直して、勞働者農民のための好い社會を作り出し、自分達をあはれむべき商品としての境涯から、即ち賃銀奴隷の境涯から解放すべく、日夜、血みどろの闘をくりかへしてゐる。

職業婦人達も、自分達の境涯が、結局は商品であり、賃銀奴隷であることを、一日も早く自覺し、同じ階級の男子と相携へて、無產階級解放のための正しい闘に、全力をあげて參加されん事を切望して止まない。



解放運動の進展と婦人の犯罪

千葉龜雄

最近の米國雜誌は、米國近代の女性解放が、法律の厄介となり、警察及び裁判所によつて所罰される女性を、驚くべき多數に作り上げつゝあると傳へる。懲治監長リチャード・パツタスンの年報々告によれば、米國で、一九二〇年に、懲治監に收監された婦人が一千百五十名であつたものが、一九二九年には二倍强、二千三百九十一名の多數に上つた。彼はそれについて附言する。過去にあつて、婦人の犯罪は、犯罪者としてはむしろ除外例として取扱はれてゐた。犯罪は、重に男性のみを中心として居たのであるが、近年の情勢より見れば、女性犯罪は、一般犯罪の水準における除外例として見るべきものではなくて、男性のそれと等しい重要さを以て、犯罪學者や、裁判所、警察等に取扱はれねばならぬことになつて來た、と。

パツタスンは、女性の犯罪者が、何故にアメリカでかく增加したかの理由に關して、以下のやうに觀察してゐる。これが因果關係をなすものは、一口に言つて、女性が昔に比べて、比較的に、お話にならない自由と解放を得て來た結果である。彼女等は、比べにもならないほどの、商業上、政治上の大きな取引きに關係し得る。次に、性的自由の、より大いなる解放、そして、その自由の權利を、出來るだけ極度に味はうとする慾望等が、犯罪までに進む結果を持ち來した。尙、前に擧げた女性犯罪者の數は、單に警察側が關係しただけの範圍であつて、法廷の上で充分に辯論をするやうになつたら、原因や統計が一層はつきり解るであらう。だから、こゝで、婦

人の解放が犯罪の原因だといふのは、いくらか大ざつぱな推定にしきや過ぎないが、しかし、この推定は、大して間違がないと信ずる。云々。

また、數年前、ジョルジ・アルガアは、米國々立刑務所における、女性犯人の增加が、一九一六年と、十年後の一九二六年では、いちじるしい變化があることを語つてゐる。即ち、一九一六年においては、七十二人だけの女性犯人があつたのが、一九二六年には、全囚人四千人から六千人の中、百十七人に增加した。そして彼が「自分は、この統計に示された兩性の間の犯罪の性質の違ひが何であるかを、說明せよと要求されないのを仕合せだと考へる」と附記したのは、それ等の犯罪の性質に、何か明言し難いものがあるからか。それとも女性尊重のアメリカの役人であるために、女性の犯罪を、事々しく說明するのを好まない爲であつたか。

それは、ともかく、女性の犯罪者が、きは立つて多くなつて來たのは事實である。そこで「ニユウヨオク・タイムス」は、「ニユウヨオク市の女性達は、昔よりも段々締りが無くなつたのか、なぜ、ニユウヨオクの女性達はかくも放逸になつたのか」と疑つた上で、その一つの原因は、女性の解放が犯罪の原因となるやうに、男性の解放が、女性犯罪者を、公に告發し、拘引し收監するやうになつたからだと言ふ。現代の女性達は、昔の西洋武士道の時代に、女性達に拂はれたやうな敬意や、いたわりを、男性から求めやうとしないし、男性もまた、そんなに女性をいたはらうとしない。そこで、過去のアメリカなら、どこまでも避けだであらう女性の刑罰を、裁判官は少しも遠慮しない。名高い女の殺人犯人が、電氣椅子で死刑にされたのは、まだ昨今の記憶にあることで、それによつても、裁判官達が、女性犯人に對して、あまり容捨をしなくなつた傾向の現れがわかる。そこで警官も「解放」されてもう、女性を遠慮なしに捕縛することになつたのだ……云々。

これは最近のアメリカの實情である。警官が今まで「解放」されぬために、女性の捕縛を遠慮したなどは、アメリカでなくては見られぬ圖であらうけれど、その警官さへ「解放」されて、女性の犯罪者を片つ端から拘引し、連行することになつたのを見れば、女性の犯罪者の增加と、犯罪の性質が、よく〳〵目に餘つて來たからの話であらう。

所で日本はどうであらうか。それには、女囚の年次統計を

并べて見るのが一番近途であるが、こゝでは、それを言はうとするのでは無い。私の言はうとするのは、職業婦人と犯罪の關係である。

過去の女性論者が、女性が道徳的に、男性に優逸してゐる條件を擧げる場合、必らずその一條件として、女性の犯罪者が男性に比べて、比較にならぬほど少數であることを擧げたものである。それはその通りで、女性の犯罪者は、いかなる場合になつても、男性より數に於て少ないし、また、犯罪の種類においても、男性ほどに亂暴でないし、また廣汎でない。體力及び暴力が絶體とは云へないが、——女性の持たない力であるために、それらの範圍の犯罪がまづ女性に少ない。けれども、女性の犯罪者が少數であつたのは、それ以上、女性がまだ社會の表立つた成員までに浮き上れる地位を持たなかつたからだ。勢ひ、接觸する部面が少ないから、社會に對する犯罪を構成する衝突や、感情の行き違ひ、または利害の關係などが自然と稀薄であつた。男性の社會はそれと反對である。だから、大抵の犯罪は男性が擔つてゐた。

だからとて、女性に犯罪が無かつたとは云へない。昔から、毒婦型の犯罪は云ふまでもないし、その他にも諸種の女性の犯罪があつた。たゞ、犯罪の性質から云へば、男性に比べてひどく陰性だ。まづ嫉妬のために他人を精神的、實際的に傷害する。これも一應は仕方のない事情がある。女性が、經濟的に、一人の男性に寄りかゝらねばならぬ境遇にゐるから、その男性を他の女性に奪はれゝば、自分は一生浮む瀬のない身の上になる。嫉妬は、あらゆる方法を動員して、他の女性が、自分の男性に近づいて來る機會をふせがうとするところの、動物の保護色のやうな武器であつた。そこまでは刑法上の犯罪とならぬが、それが度を越して、競爭者を實際に殺害するやうな場合になると、彼女は明らかに裁かるべき犯人となる。

次に虚言が犯罪を構成した場合が多いが、その他の犯罪の著しい一つは、財物の獲得慾から、他人を殺傷するものである。この方は、痴情の果に、競爭敵たる女性や、或は忘れられた男性を傷害した犯罪と、數の多量において匹敵するであらう。それも同情すべき理由がないではない。女性が經濟上に獨立し得ないことが、彼女等にとつて何よりの引け目である。そこで出來るだけ富を持たうとする。或ひは自分が持た

ぬまでも、自分の血統である子或は孫のために財産を多く獲得してやりたい。それが所詮は、彼女自身の地位を安全にし得るからである。

その次に來るのが、一番質の惡い犯罪である。それは目に見えた犯罪では無い。また意識した害意ではないが、しかし、これが事實となると、恐るべき結果を來す。外ではない、女性の奢侈心である。女性の奢侈と虛榮が、實際に現はれて、女性が竊盜罪、殺人罪を犯した事實はもちろん數多いが、それ以上、その奢侈と虛榮のために、男性を動かし、男性をして、彼女等の好意を獲るために、あらゆる不合理を行はしめた方がもつと多い。政治的に、人民をしいたげて、非道な搾取を敢てせしめたり、男子の節操や主張を捨てゝ、利慾の獲得に浮身をやつさしたり、數限りない道德上、政治上の犯罪を敢てせしめる。「女性と勞働」を書いたシユライル夫人が、「寄生虫としての女性」の一項で、近代女性の頽廢性を、極度にやつゝけたのがこれ等の女性層を指すのである。

要するに、これ等の女性犯罪の傾向は、財物の獲得であれ、嫉妬の發露であれ、もしくは、虛榮、奢侈心の發現であれ、一口に言つて、女性の「男性從屬時代」の特殊な犯罪として種を下してゐる。男性に飽かれまい、男性に捨てられまい、財物によつて頼りない女性の安定を得たい。といふのが、その根本眞理である。ロオマや、フランスを滅ぼした婦人の奢侈や虛榮心も、つまりは、美しく裝い、華やかに飾り、男性の愛護から離れまいとするところの、自己保存の心理から生れたのである。そこで「男性の犯罪の後には女性あり」も眞理であるが、しかし、「女性の犯罪の後に、男子あり」といふのも、同等に眞理であつた。こんなわけで、その頃の女性の犯罪は、性質がいくら深刻であつても、それは社會的であるよりも、家庭的であり、愛慾的犯罪であることを常とした。それが正しいと思ひ込んだからは、堂々と運動を推し進めて政府や警察と戰つた、英國女權獲得運動などは、その頃には夢にも見られない現象であつたし、その代り、女性の犯罪者も少ない。

フランスのオリンプト・ドウ・グウヂユ夫人は、男性も絞首臺に上る權利があるやうに、女性にもその權利がある。同様に男性が帝王になれるなら、女性だつて帝王になれるではないかと、フランスの王宮に押し寄せた。社會の表向きに男性が

活動し、それが爲に、諸種の犯罪も起るやうに、女性が男性と同樣に、社會に活動するやうになれば、女性の犯罪だつて昔と比べものにならぬほど多くなる——無論、犯罪は、いかなる場合にも好ましいものではないが——女性が極度に解放され、商業上、政治上、社會上に活躍する面の廣い米國で、女性犯罪者の增加したのは、好ましいことでは無いが、已み得ない現象である。日本だつてその例を洩れまい。

しかし、現代の女性犯罪は、第一に犯罪者の社會層において、第二に、犯罪の性質において、前代のそれと全く違ふ。前代のそれは、ブルジョア有閑階級の婦人であり、犯罪が唯心的、自我的、專有的であるのを特質とし、後者のそれは、無產者層であり、その犯罪が唯物的、社會的であるのを特質とする。

ブルジョア婦人層は、たとへ法律上の犯罪を犯さずとも、社會道德に對しての犯罪者である。社會にその日の飯が食へぬ者がどれほどあらうと、自分達だけが好きな虛榮をすれば構はない。といふのだから、それ自身腐つて居り、救へない。無產者層は、精神的には健康そのものである。が、貧乏であり、食へない。食ふために、意識しないで犯罪のわなへ踏み込んで了ふ。ブルジョア道德や法律は、ブルジョア社會の、社會道德の背反に對しては、それを罰する何等の制裁もない。むしろ法律は、彼等を保護する形になつて居る。法律そのものがもと〳〵無產者によつて作られずに、ブルジョア層によつて作り上げられてゐるからでもある。そこでブルジョア社會の安定を、少しでも侵すことのないやうに、無產者層を、嚴重に取締るための法律だとも、見やうによつては考へられぬこともない。

たとへば、職業婦人が、性慾的行動で、風俗壞亂の廉で取調べられたといふやうな記事が、新聞紙上をひどく賑はす。ブルジョア讀者は、それは彼等のやり相な事だと、面白づくに嘲笑する。職業婦人が墮胎した。棄兒した。賣淫した。云々のそれを片つ端から嚴罰する。われ等は、國家の法律の精神を尊敬しないものではないけれども、法律と無產層の關係になると、社會の既成意識を、どう考へてもそのまゝに受け入れられないのである。それは、第一に、ブルジョア階級意識のみによつて無產階級を見、第二に、男性優越感によつて女性を見やうとする、古い因襲から少しも改良されてゐないからである。彼等はまづ、食はせねばならぬ人類の本能を實

験した事がない。體驗したことがない。食はねばならぬためには、人類が、どんな汚辱にも堪えるものであるかをも知らない。道徳とか、體面とかは、どうにか食へて後の話である。が、彼等は食へないのだ。食はねばならぬために、最後の途を採るのだ。この場合における彼等の行動は、ブルジョア社會が考へるやうに、道徳意識が無いからではない、道徳的であるか、ないかを超越して、たゞ食ふために奉仕するのだ。だから彼等を責めやうとするならば、道徳や體面の罪惡感で責めてはならない。まづ、何故にかくも餓えさせたかに考へを戻さねばならない。萬事はそれからである。府下にもらひ兒殺しがあつて、その兒供は、女給の私生兒などであつた。が、吳れる者を責めてはならぬ。吳れねばならぬやうに女給を仕向けた、父親認定の法律が惡い、男性萬能の我國の因襲がいけないのだ。女性の性解放が犯罪を作るならば、それは、より多く放恣なブルジョア女性の側にあるであらう。職業女性の性の解放は、結婚が經濟的に遲くなるのと、食はんが爲から起る悲劇である。が、それが、何にしても、女性の職業戰線への進出が、いろんな意味で、いはゆる「女性犯罪」の機因を多くして行くことは、悲しいけれども事實である。

それなら、どうすればよいか。どうすれば、女性犯罪者を絶滅するか。スザンヌ・ラ・フォオレッテ孃は、著書「女性に闘して」において語る。女權運動の女性達が、政治權を獲得した。それによつて、立法の權力をも獲得した。女性政治運動者達は、それで鬼の首でも取つたやうに喜ぶか、それが何であるか。政治權と立法權を女性が獲たことは、やつと男性の地位へ來たといふことだけでしきやない。しかし、それで女性の幸福が得られたか。否、大いに否。黒人も、やつと政治權と立法權を闘ひ取つた。それで黒人の幸福と自由が獲られたか、否である。普通選擧權が獲られても、民衆が一向に幸福にならぬのは、一番根本であるものをまだ獲ないからだ。それが何か。經濟權！　女性の自由と獨立だつて、經濟權を闘ひ取らぬ限り、自由も、獨立も、本物にはならないと……まことに、その通り……。

× × × × × × × ×



筑波秘録

大衆座

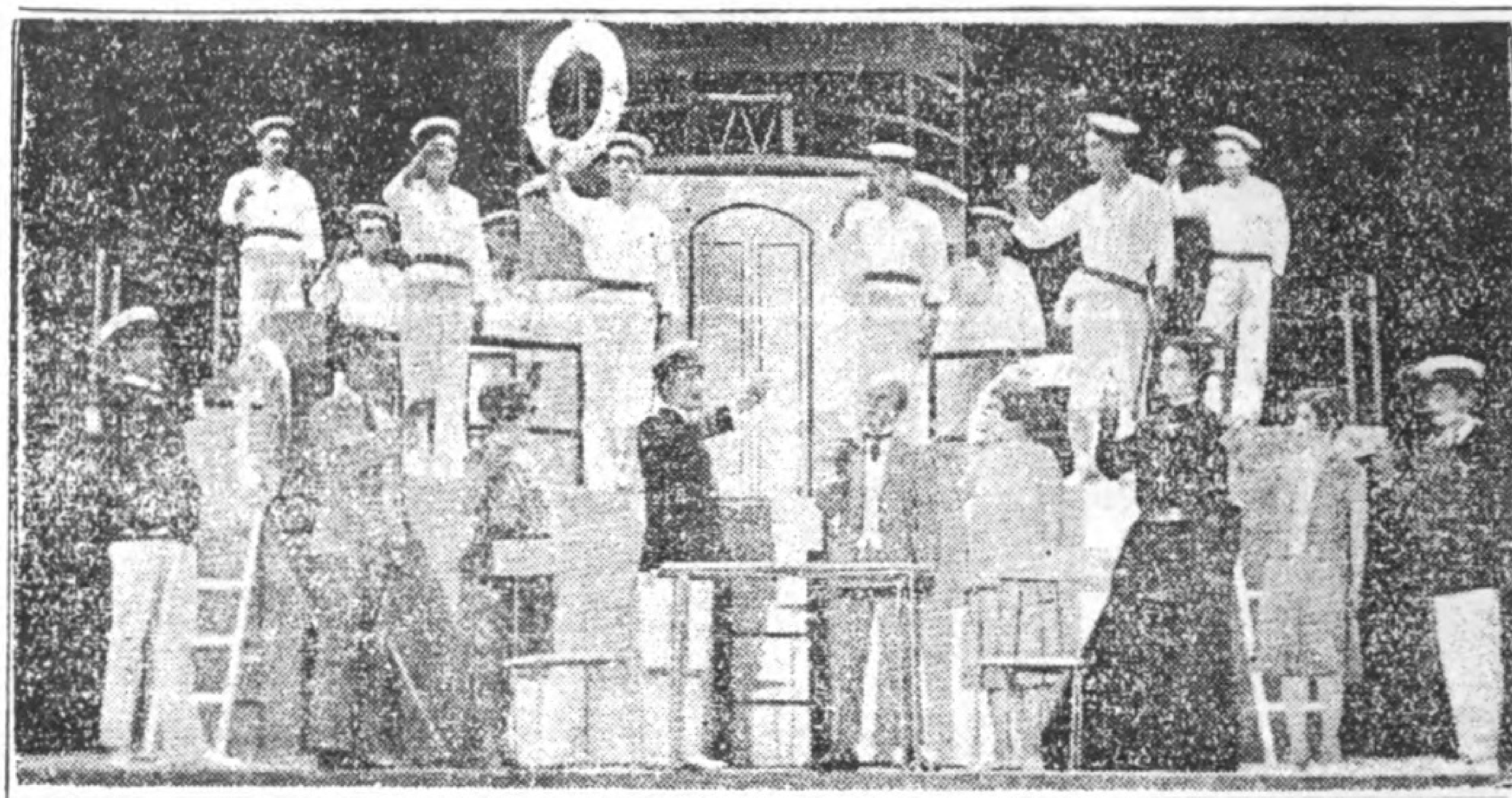
これは市川八百藏、同小太夫、同笑猿、中村翫右門、同鶴松氏等の組織した、「大衆座」旗あげ公演の爲に、落合三郎氏が書き下したもので、今年一月下旬、本郷座で三日間公演し、プロレタリア大衆の一新機軸を出した。

「筑波秘録」は、明治十七年頃、民衆の先頭に立つて果敢な闘爭を續けた自由黨決死の闘士の活躍を現したものである。柿沼、宇賀、井出、はん子等の鐵の如き闘志、自由の戰士柿沼に對する藝者千代菜の悲戀。「あの人達は正しいのだ」と正義の旗の下に、命を投げ出して自由黨を支持する獵師伴作の一子猪之助に對する愛。

閥族政府の專政、暴虐は日に募つて行つた。

「我に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」民衆は遂に起つた。起つて傷いた。奪はれた自由は永遠に彼等の手に返らないであらうか。否、否、「この企てが人民の權利と自由を獲得する道程の上で貴重な土臺石になる事」は、柿沼初め一撥全員が確信してゐた事である。伴作はその子猪之助に最後の言葉をのこして死んでゆく。

「お丶猪之助か……俺はもう駄目だ。お前は何とかしてこの場をきりぬけ一身を全うしてくれ、い丶か。そして、そして、秩父の一揆がどんなものであつたかを日本中に傳へるんだぞ！　俺達は敗けた。みんな敗けた。だがお前が大人になる時分には……」



吼える支那

築地劇團

「吼える支那」はソビエツトロシヤの詩人トレチヤーコフの作品で、メイエルホリド座で上演して非常に評判になつたものである。メイエルホリド座といふのは、現在のロシアで最も高く評價されてゐる劇團で、新しい戯曲を、新しい、獨創的な様式で上演しては、いつも評判を得てゐる。「吼える支那」一編は、この一座の上演目錄の中でも有名なもので、最近はドイツのラインハルトやアメリカのシアタギルドが上演の計畫であると云ふ。

劇團築地小劇場がこれを上演したのは昨年の九月上旬で、大劇場侵出の第一回公演である。我々は八月の暑い盛りに毎日汗を流しながら稽古をつんだ。

この劇は支那の被壓迫階級が次第に目覺めて行く經過をゑがいたもので、場面はある港の波止場である。沖には英國の砲艦がこの植民地的支那を威嚇するやうに碇泊してゐる。

苦力たちは安い賃銀で酷使されてゐる。その苦力の一人が砲艦へ出入りしてゐる一米國人の無法を憤つて、賃銀のことから格闘になり、米國人は誤つて溺死する。砲艦では白人が支那人の爲に虐殺されたと云ふので損害賠償を要求し、もし本人が見つからぬ場合は身代りの苦力を二人死刑にすることを主張してやまぬ。

砲艦の上ではヂヤズの音樂につれてフオツクストロツトがおどられ、幾度もの



市長の歎願も聞き入れられぬ。波止場の苦力達の間では誰が犠牲者になるか籤がひかれる。老苦力と妻子のある苦力とが籤に當る。かくして二人は仲間のためにいたましい犠牲になつて行かねばならぬ。

かうした事件を綴つて、波止場の無線電信所に務める火夫が反抗と憎惡のやり場をどうしていゝかわからぬ苦力達を一つのかたまりに團結して行く。いよ〳〵死刑執行の日になつた。仲間の爲に犠牲になつて行く二人の苦力、泣き叫ぶ妻子。この傷ましい犠牲を目撃して苦力達の反抗は極度に高まつて行く。死刑は終つた。砲艦の人々は引きあげて行く。

「吼えろ支那、一人が斃れても叉順に起き上るんだ」

苦力たちの反抗の叫びは一つの大きな怒號になつて響き渡る。

かうした風にこの劇は支那に於ける帝國主義の無法と侵略と、その下にうごめく苦力達の反抗をゑがき、波止場の風物や、砲艦の上の安逸な生活や、チヤズや、胡弓のもの悲しい音の中に、自らを縊つて死ぬ哀れな支那ボーイなどを點綴して、スピードのある、些かの弛みもない劇を構成してゐる。

築地小劇場の演出では、前舞臺に波止場を、後方に砲艦の甲板を作へ、劇の進行につれて砲艦を前後に移動して、この劇の持つ構成力とスピードを生した。新興演劇として最大の收穫だといはれた。



西部戰線異常なし

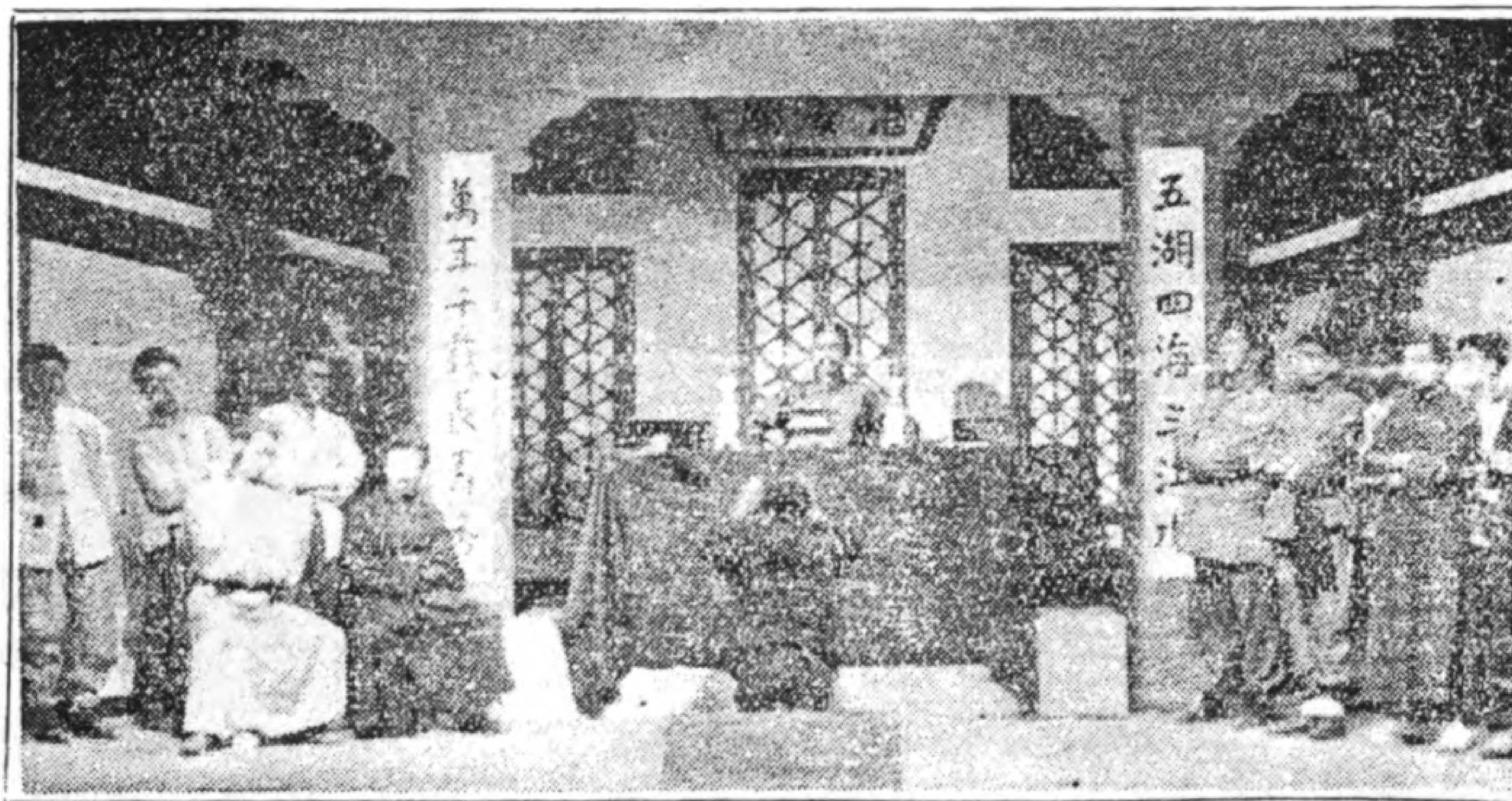
築地劇團

「西部戰線異常なし」は、ドイツの一無名の青年エイリツヒ・マリア・ルマルクが歐洲大戰に從軍した生々しい體驗をゑがいたもので、その小說が一度刊行されるや、文字通り嵐の樣な反響を呼びおこして忽ち世界各國に飜譯され、我國でも中央公論社から出版されてその發行部數は最近の出版界のレコードだと云はれてゐる位である。

築地小劇場でこれを上演したのは昨年十一月本鄕座公演であつた。村山知義氏に依囑して脚色してもらつたものである。原作は飾氣のない素朴な筆致で、戰爭の體驗をゑがき出したものである。

今生きてゐるかと思ふと次の瞬間には死んでゐるかも知れぬ戰場。家庭からすぐに戰場に送られて、人生も、生活の喜びも知らずに老人になつたやうな青年達、砲聲、夜襲、突擊、そこにあるものは戰爭と、食慾と、色慾とだけである。一言めには食物、二言目には食物の話である。

村山氏の脚色はこの素朴な原作に帝國主義戰爭の慘禍を書き加へることを忘れなかつた。劇の主人公とも云ふべきものはパウルといふ一青年で、家庭からすぐに戰場に送られて來てゐる。その彼をめぐつて兵隊仲間の古狸のカヂンスキーや負傷して病床に橫はりながら、故鄕や母のことを追想しつゝ死んで行くケンメリ



ツヒや百姓上りのデテーリングや、泥炭ほり上りのエストフースや、病氣で青ぶくれしてゐる錠前屋上りのチヤーデンや、溝鼠のやうな顔をした老人の兵隊カントレックなどがゐる。

戰場でのこれらの若い兵隊たちの生活は如何に人間性の失はれた悲慘なものであつたか。一度歸休して故郷へ歸つたバウルは再び戰場へ歸つて來て、今まで憎しみ殺して來たフランス兵と相抱いて斃れる。その時轟然たる爆發があつて一面の火と煙と土砂の中にこの劇の幕は下りるのである。

帝國主義戰爭とは何であるか。そしてその戰爭はどんな悲慘なものであるか。――「西部戰線異常なし」はそれを雄辯に物語つてゐる。この一編は一青年の生と死の記録であるばかりでなく、何十萬の青年の生と死の記録である。

築地小劇場の公演の時には非常な人氣をよんで、興業界まれに見る大入りであつた。

全線　　左翼劇團

「全線」は村山知義氏の作、暴力團記を改題したもの、本年五月から六月にかけて左翼劇團の手によつて築地小劇場で上演されたものである。

この劇は中國に於て二七慘變と呼ばれてゐる事件に取材してゐる。一九二三年



二月七日、當時創立大會を持つ運びになつてゐた革命勞働組合「總工會」の指導の下に北京から漢口に至る京漢鐵道全線に亘つてゼネストが敢行され、結社の自由の爲に鬪つた多數の戰鬪的勞働者の血が中國の大地を染めた事件こそ、この二七慘變に他ならない。

この爭議は反動軍閥呉佩孚の死物狂ひの彈壓に依つて敗北に歸したが、この偉大なる犧牲こそ全國的總工會の基礎を固め、黨の大衆化を、より促進せしめたものである。

軍閥呉佩孚は暴力團「綠黨」を使つて、京漢鐵道總工會創立大會ぶつつぶしを計る。總工會の革命的勞働者は、死を以てこれに耐え、遂に二月四日、全線ストライキに入つた。

鄭州支部の鬪士龔青山は、捕へられて××され、その苛酷に耐へかねて、その支部員に降服を勸告させられようとしたが、その母や妻の激勵は彼をして、遂に××の銃口の前に、敢然として立たしめる。死に臨んで彼は叫ぶ。「京漢鐵道總工會萬歲！」



太陽のない街

左翼劇團

「太陽のない街」は徳永直氏の原作である。

○

一九二六年の暮れ近く、神樂坂のおでん屋でチビ〳〵一杯傾けてゐる吉田といふ男がゐる。丁度その頃大同印刷株式會社では、鑄造課職工三十八人の馘首をきつかけに、三千人の從業員は一齊に資本家大川に挑戰して、一大ストライキに入つた。會社側は裏切職工、暴力團を雇ひ入れて日夜切崩しに奔走してゐた。吉田はその會社の廻し者の一人である。

○

事件は激化した。爭議團員宮池は、大川の邸に火を放つたが、目的を果さなかつた。彼は爭議團、及び組合ぶつつぶしを畫策して歸途にある大川を、一刀の下に刺さうとして、矢張り目的を果さなかつた同志の罪をも、一身に引き受けて自首すべく決心した。彼の戀人お加代はその時身重になつてゐて、斷腸の思ひをしながら、けなげにも見送る。

○

買收につとめる吉田、「救濟」する爲にはいり込んで來る佛教婦人會の幹部連、それらは爭議團の婦人達の爲に苦もなく追拂はれてしまつた。消費組合の黒岩は、



やりくりをして米の配給をやる一方、血の出る樣な言葉で絶えず激勵してゐた。彼は爭議團にとつて最もよき應援者だつた。

○

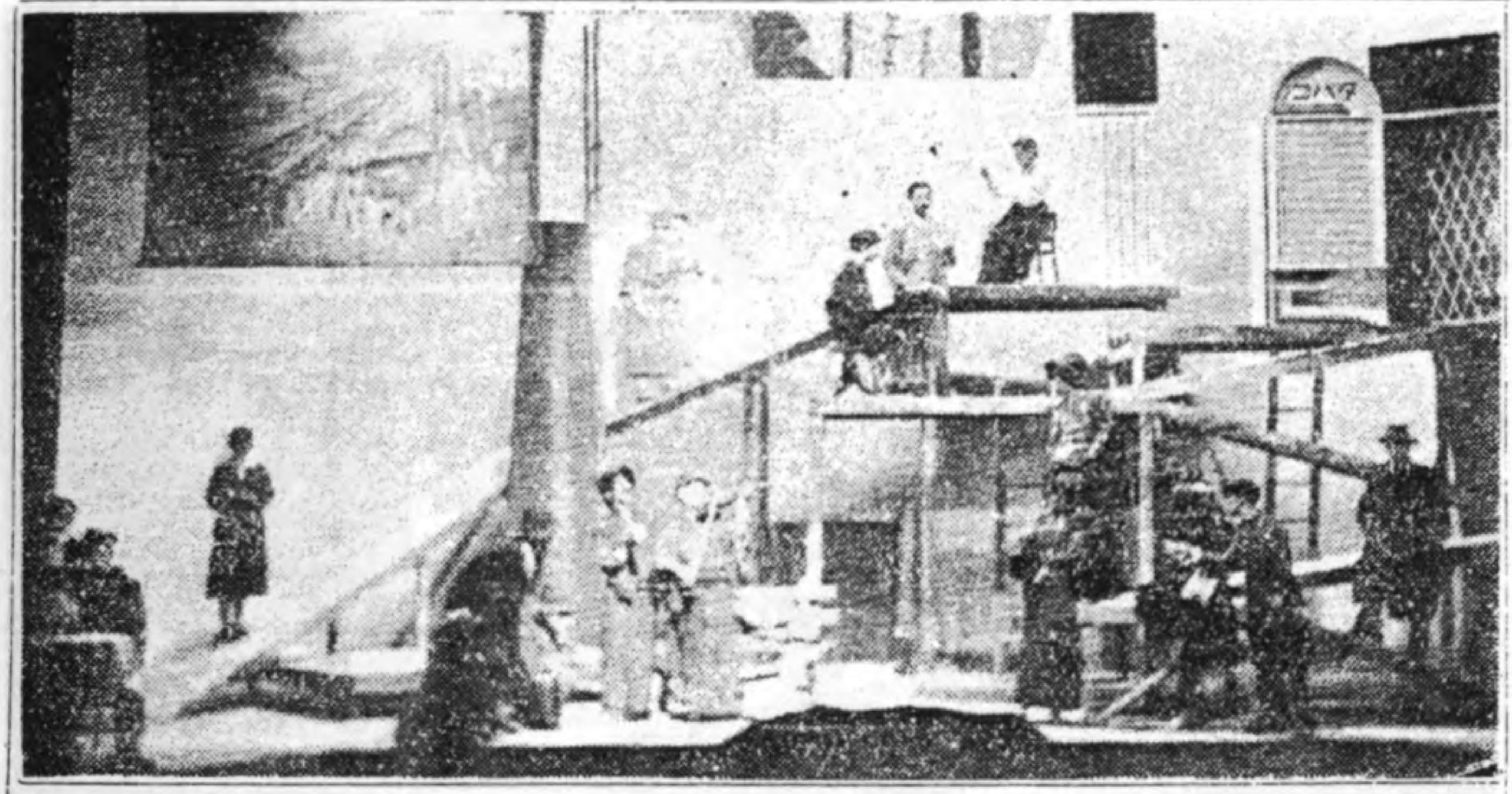
爭議が初つて七十餘日を經過する爭議團は、日に日に苦境へと陷つて、裏切りは續出する。表面贊成を裝つた區内の有志が公然と共の正體を現せば、延命院の住職日善も、今迄の集會の會場を借さぬといふ。そして遂に爭議團員の中にも裏切者が出やうとした。暴力團の爲に負傷して歸つた萩村は、一同の魂である鬪旗を入口に置いて言ふ。「判らねえ奴は會社へ行かうと何處へ行かうと勝手だ。だが行くなら行くでこの旗をまたいで歸つてくれ！」

○

財閥澁阪と手を握り合つた大川社長が、今後五ケ年間の利益を抹殺しても、絶對に爭議團を打ちくだかうといふ決心は堅かつた。俄然檢束の魔手が爭議團本部にのびる。それつとばかりに重要書類其の他を處置して彼等は、すぐ樣夜の暗闇に消える。その後へ歸つた婦人部の高技は、留守を守る女達に、先に檢束されて行つたお加代の死を報ずる。宮池の出獄の日を夢に待ちながら、お腹の子供と共に死んで行つたお加代は死んだのではなくて、實は×されたのであることを彼女達は語る。

○

男が誰もゐない爭議團。だがその時、九州から、四國から、北海道から、朝鮮から、五千の應援鬪士と、二萬圓の寄附金とが「太陽のない街」へ向つて、續々と送り込まれてゐる。



都會双曲線

新築地劇團

「都會双曲線」は林房雄氏の原作、落合三郎氏の脚色にかゝるもので新築地劇團によつて上演され非常に評判であつた。

序曲——大都市のフラッシュ・バック。その一隅に、啓太郎と良子が田舎から職を求めに都會に出て來て腰を掛ける。何故彼等は都會に出なければならなくなつたか？　それに就いて二人は全く何も知らない。

第一幕——「裏街を漁る雜誌記者」の黒田は、金持ちの息子水野が相續した二十萬圓に眼をつける。水野はビルデイングの賣子になつてゐる良子に惚れて、銀座裏の酒場まで從いて行くが醉ひつぶれてしまふ。黒田は夜更けに良子の家を訪ねるが追ひ返へされる。

第二幕——黒田は凄腕の惡黨大賀新平と圖つて、二十萬圓を捲き上げやうとする。水野はお坊ちやん式の空想的な改革熱と事業慾にそゝのかされてその手に乘る。良子も黒田に利用されて水野の秘書になる。

第三幕——水野は良子を連れて炭鑛に乘り込み、人道主義的な理想論を實現しやうとする。大賀と黒田はそれを笑ひなから都會で、酒よ、女よ、で暮してゐる。そんなことゝは知らぬ水野は、本社からの援助を待ちつゝも次第に自分の財産を事業につぎ込む。



啓太郎は同志と元氣よく闘爭を押し進めてゐる。

第四幕――黒田は自分では惡黨がつてゐても積極的な資本の攻勢隊ではない。いよ〳〵となると利用してゐる積りでゐて、却つて大賀に利用されることになり、やつと一萬圓持つてわざ〳〵鑛山の水野の所まで出かけて行くが、それんばかりの金で、全鑛山の坑夫の仕拂ひが出來るはずがないので、水野をそゝかし坑夫達を欺いて山を逃げ出す。水野はトロッコで負傷し、ほう〳〵の態で東京に逃げ歸る。

良子は交渉の爲坑夫達と共に上京したが、大賀の事務所のあるビルディングで啓太郎に出會ひ、啓太郎の助けによつて大賀から金を取ることが出來る。お坊ちやんの水野は自分が二つの階級の何れにとつても如何に不用な存在であるかを知る。大賀と黒田の泥仕合は勿論兩者共みぢめな敗北に終る。

かくて闘爭の渦中にある啓太郎は、早朝數人のスパイに襲はれるが、す早く逃れる。啓太郎を訪ねてその後に來た良子が却て連れ去られる。

所詮、相會はぬ都會双曲線!?



蜂起

新築地劇團

「蜂起」は藤森成吉氏の作であつて、本年二月新築地劇團によつて上演され、人氣を博したものである。

封建制度が最高の、變革し得ざる社會組織だと信じ切つてゐた、時の中央政府幕府が、必然的に崩壞の道を辿りつゝある結果、表面は苛酷緊縮の政策となつて現はれ、裏面、民衆の熱烈なる要望を彈壓蹂躙し、賄賂、買收は公然行はれた時代――天保十三年は鬱勃たる民衆怨嗟の呻きの中に初まる。搾取――それは此の時代に於ても常に最後の階級、農民の上にのしかゝつて、常ならば田に滿つる黃金の波に鼓腹し、比叡の初雪を見ては來年の豐作を喜び合ふ筈の琵琶湖畔十萬の農民は、連年の重い上納の爲め疲弊し、困憊し、只自失して荒涼慘憺たる田畑を眺めるのみであつた。

「檢地」――五尺八寸一間の竿で村の周圍を量り、在來の上り高(米)よりも廣い面積が出れば、それに相當した丈けの上納石高を農民から取り上げる――の役人としての幕府の勘定方、市野茂三郎が近江國重洲郡野田村の庄屋木村定八方に宿る。農民は、農村は最早や之れ以上の搾取には堪へ得られなくなつてゐる。舊九月二十六日、甲賀郡水口の宿萬世寺に於て、肥料値段引下歎願の相談と僞つて農民代表者會議が開かれる。實錄に據れば甲賀、野洲、栗太三郡の代表者その數五



百を越ゆ、とある。

學問も何もない、働いて而も辛うじて食つてゐるだけの彼等農民達は、此處で始めて自分達を救ふものが最早や反抗以外になく、又反抗のみが彼等に殘された唯一の道であり、そして一方彼等農民大衆の「反抗の力」を彼等自身信じ初める。かくて暗默の内に九月を送る。

十月十四日深更、月清くして恰も晝の如し、忽ち聽く鐘聲の耳を貫きて起るを、須臾にして法螺貝は四方八面より之に應じ、鯨波の聲天地を震動す……。翌十五日に此の大蜂起軍は奔流の如く惡庄屋の家を通過し、十六日嬉々として膳所藩の警備隊を突破し、同夜堂々と水口藩鎭撫隊と對陣し、肅々と議し、嵐の如く市野の本陣を襲つて來る。市野は一時欺いて逃れるが、又農民の手中に陷り、「近江の國川筋湖水べり村々の檢地十五日の間日延！」の證文を書く。彼等が完全に解放せられない間は、彼等の勝利は多くの場合敗北に續いてゐる。五日の後には早や檢擧の手は一齊逮捕にまで伸びる。訊問と××と××。

だが彼等はそれに屈しただらうか？

鐵窓に冬を送り、天保十四年春三月、發頭人、徒黨頭は江戸に護送される。途中で遂に死ぬ者さへ出る。彼等は敗れたゞらうか？

四月江戸に着く。大白州で血を吐く如き彼等の雄叫びが擧がる。檢地は取止めとなる。彼等は敗北を次の日には必ず勝利に置き代へないではおかない。彼等だけが其の力を持つてゐるのだ。最後の勝利を獲得する力を。



セツルメントの意義と使命

牧　賢一

一

澎湃として奈落の瀧壺へと躍る大激湍の如き社會の奔流に向つて棹す些々たる社會事業の努力が、果して如何なる價値を持つか？

それは、既に資本主義の顚落が云爲される今日、うかつにも漸く社會事業の意識し始めた――恐らくは本質的なる懷疑である。が、それが例へ如何に遲蒔きであらうとも、社會事業が其自己批判に發足したことは、それが關はりを持つ社會、殊に其の直接對象たる無產大衆のために、大いに喜ばしいことだと云はなければならない。自己批判は、それが飛躍或は沒落の何れを結果するとしても、それ自身生命にとつての進步だからである。

歴史の流れが孕む必然の力と、さゝやかなる社會事業の働きとを比較すること其のこと自體が既に無理なことではあるが、然し、今まで、人間の美はしき本然的なるもの、同情、慈善心の如きものゝ影に覆はれて、社會の機構から獨立した神秘なる存在かの如く裝はれ來つた社會事業が、其の資本主義的基底を剔抉され、否、無產階級のために在りし筈の其れが、反つて資本家階級の自己擁護、安全瓣、產業豫備軍再生產の手段としてこそ――社會事業家當事者の無意識にも拘はらず――其の金融背景によつて支持されて來た、其の正體を曝露されたのは、極めて最近のことである。

そこにも亦反動の嵐は吹きまくる。然し、其の嵐を超えて無產大衆のために、社會事業に對する忌憚なき批判と其の淸

算の强要と、そして新しき社會事業の樹立とが、永遠に平和なるべかりし斯界の凡ゆる分野に於いて鬪はれ始めてゐるのだ。それも時代の然からしめた必然であらう。

二

然るに、斯くの如き社會事業動亂のさ中にあつて、新しき黎明の希望に尖端を切つて進むもの、否、進み得るものがある。それは即ちセツルメント事業だ。

セツルメントとは何ぞや？　之が今私に與へてくれてゐる課題である。セツルメントを説く前に、先づ其の背景であり、屬する王國である社會事業の情勢をスナツプしたのは、やはり社會事業の一分野としてのセツルメントの現状を知るために必要と考へたからである。

さて、セツルメントの意義と使命について述べるに先立ち先づ結論を云ふならば、セツルメントとは、教育的社會事業であり、無産大衆の世界文化享受への助力を使命とする仕事、即ち有知識階級の無知識階級への働きかけである。

斯くの如き社會事業は、凡そ今日の社會事業觀念と背馳すること遠きものであり、或は又文部省邊りで鼓吹してゐる所謂社會教育、社會敎化の類と混同される怖れがある——たしかにセツルメントは充分之等の反動的教育宣傳機關と化し終る危險を持つて居り、現に我が國獨特の官公立セツルメントは明らかにそのために役立つてゐる——が、今茲に云ふセツルメントとは決して斯る類のものを指すのではない。更に嚴密に云へば、セツルメントが、其の背景、其の財政的基礎に於て爾餘一切の社會事業と類を同じうするにも拘らず、よく新しき使命を果し得ると考へられる所以は、其の教育的役割の遂行に當る從事者の自覺、新しき時代に生きるイデオロギーに期待することが出來るからなのである。

三

「英國は富に充ちたり、されど英國は將に榮養不良に死せんとす。」と云つたカーライルの言葉は、今日凡ゆる資本主義國の狀態に當てはまる。

彼をして、斯の詭辯を弄さしめた十九世紀の末葉、資本主義の魔手漸く暴威を振ひ、自由主義の美はしき夢は破綻して、無產階級の團結による自己解放を直接念願とする社會主義思想の擡頭しつゝあつた當時英國に於いて、即ち一八八四年、ロンドンはイースト・エンドの貧民窟に、此のセツルメントは始めてケムブリツヂ、オクスフオード兩大學の若きインテ

リゲンチヤの手に建てられたのだ。之有名なるトキンビー・ホールである。

アーノルド・トキンビーは外科醫ジヨセフ・トキンビーの子として生れた。生來蒲柳の質として健康に惠まれなかつた彼ではあつたが、裡に燃ゆる熱火の如き信仰と愛とは、遂に彼がオクスフオード大學を了へるや其の教職に就くと共に、直ちに勞働者階級への働きかけへと進ませた。そして彼は其の經驗から、彼等を救ふものは唯教育であり知識であることを悟つた。又彼等の苦惱の現實生活を救ふものは協同組合、團結であることを知つた。彼の數年に亙る貧民窟での活動は目覺ましかつた。彼は勞働者クラブのリーダーともなつた。其の消費組合を援けもした。講演や講義もすれば又調査の仕事にも當つた。が、一八八三年、ひたぶるに燃え上つて抑ふるに間なき情熱の焔は遂に其の肉體をも燒き盡した。時に年齡僅かに三十一。卽ちトキンビー・ホールは彼の名を永遠に記念するために建てられたのだ。爾來、この大學延長運動と流れを同じうするセツルメント・ムーヴメントは忽ちにして世界各國に傳はり、今や其の數は千二百を超える。

四

新しき人達の中に這入り込む、卽ちセツル=殖民することを特質とするセツルメント(Settlement)は、其の到るところ、其處に於ける地區生活の實情に順應して、其の仕事の種類に、性質に、夫々趣きを異にする事となつた。然し依然、其の中核を貫流するものは、教育であり、文化紹介である。

セツルメントでは、乳兒、幼兒、靑年、成人の男女を問はず、貧困家庭を對象として凡ゆる直接或は間接に教育に關する仕事が行はれる。それはセツルメントが所在する地區の必要に應じて、緩急に應じて、自由自在なプログラムを創る、プログラムなきプログラムこそ、セツルメントの一特質をなすものと云へる。卽ち此のセツルメントの彈力性の故に、それは又新しき時代にも遲れずに適應出來るのだ。從つて其處では諸多の事業が、少しづゝ、雜然として行はれてゐるやうに見える。之は人をして、「セツルメントは綜合的社會事業なり」と云ふやうな誤解をなさしめる。相當な社會事業家の中にも斯る本末を顚倒した見解を持するものがある位だ。

が然し、それは所詮其の教育的使命と彈力性とに基因する現象を見た結果に過ぎない。それはどこまでも、其の所在地區のもの、其の近隣のものとしての教育施設、文化施設、そ

して助力機關であるべきである。そこには、救療事業も、經濟施設も、又單なる救助事業も行はれるであらう。然し、それは必らず、最後の「敎育」に結び付けられなければならない。

然らば、此のセツルメントに於ける敎育とは何であるか。それは、今日、時間的餘裕と經濟的剩餘を所有する小數有產階級に獨占されてゐる文化を、勞働者農民、小市民、女性、=全無產階級に等しく享有せしめることだ。セツルメントは其の有する經濟力と知力と場所とによつて、欲すれば、よく之をなし得るのだ。文化―知識は、又必然、長き間無知を强制されてゐた人達を開明し、彼等を其の自己解放への努力へと押しやるであらう。それから先きは、强力なる社會運動の役割が待つ。

五

即ちセツルメントの敎育對象は未組織無產大衆、ルンペン・プロレタリアートであることが明かになる。

セツルメントは知識階級の無知識階級に對する働きかけである。然しそれは、どこまでも助力であり、協力である。上から下への=縱の運動ではなく、橫の=腕と腕とをガツチリと組み合せた運動である。從つて其の經濟的基礎も、近き將來に於いては、無產大衆の自助的協同組合組織に置かなければならない。其の過渡的手段としては中產インテリに協同を求めることが考へられる。然らざれば、愈々尖銳化する資本の攻勢と暴壓に對して抗爭することが出來ないであらう。

セツルメントは、新しき社會招來運動のよき赤十字であり、兵站部なのだ。從つて其處には婦人の最もよき働きと特殊なる役割が期待される。（一九三〇・七・二四・朝）

婦人セツルメントを開始す

私たちはセツルメント運動に入ることになつた。

婦人セツルメントとして、私たちにどれだけの仕事がやつてゆけるか、その力だめしの仕事場として、又、私たちを社會的に訓練し、强き闘争力を内に培ふための道場として、今、未踏の第一歩を進めようと勇躍してゐます。

私たちのセツルメントは本所區林町二ノ七八に在り階上階下計百坪程のバラツクでありますが、この家を開放して子供たちのためによい勉强室となり、遊戯室となり、主婦のためにはクラブを、娘たちには學校を、實習室を、授産場を、等々、隅々に取殘される一分のスキもないまでに生かして、みんなで働いて勉强し合はうといふのです。今、この家には三四脚の椅子と二つの机と、黒板と貧しい臺所道具の一揃へと（それも、職業婦人社事務所用として八年の間にみんなで持寄つたものだけ）しかありません。莫大な金子を投じて立派に完備した府市の隣保館に比べて何といふとぼしさでせう。

然し、私たちはこのとぼしさの中に、溢れるばかりの熱と迫力を、自治と協同の上に灼いて、大人も子供も——いふまでもなく男も女も一つに結び合つた强大な闘争體を形成してゆかうとするのであります。今日の社會的大勢は私たち無産者の階級的自覺と協同の必要を一層切實にしてゐます。これまで立ち遅れ氣味だつた女と子供のもの丶見方考へ方には、殊に大革

新を必要とするものが多いと信ずる私たちは、この「家」をそのための社會學校として、一枚の紙、一椀の飯にも心をこめて役立たせて行きたいと思つてゐます。

從來、セツルメントの仕事は所謂社會事業として、惠まれたる階級の人々が進んで惠まれざる生活の人々の中に入つて行つてこれを指導し、敎へ、慰安する程度の職能をもつものと考へられ、且つ、そのやうにして行はれて來てゐるやうでありますが、この考へ方は私たちの肯定しえない處であつて、私たちは、この「家」を私たちの道場とし、私たちの學校として、近隣の大人や子供と一緒に生きつゝ私たちプロレタリアに必要な社會的自覺と、階級的鬪爭力を育成する機關としなければならぬと心構へてゐます。從つて、この「家」は、志を同じうする全ての婦人に解放する社會學校であり、誰でも來つて、一生徒としてこのセツルメント運動に協力されむことを希つてやみません。

幸なことにセツルメントの近くに、この頃發會式を擧げたばかりの共働消費組合があります。私たちはこの組合の一員として消費組合婦人運動を進めてゆく準備も出來てゐます。工場地帶ではない、無産小市民の雜然たる住居地である林町、綠町の一帶を組織して、消費組合網で包むといふことは必要な仕事であります。

その他、婦人セツルメントを中心として働いてゆくにふさはしい仕事は實に多いが、然し、仕事のために仕事を追ふ輕卒を嚴につゝしまねばならぬと反省してゐる私たちは、よい協力者よ、殖えよ、と念じ乍ら毎日、近隣の科學的調査を進めてゐます。

婦人セツルメントをして熾んならしめよ。

娯樂と社會相

深尾須磨子

最近封切り公開されたフアスト・ナショナル社の映畫「流行の寵兒」一卷には、わが國現在の社會相にも相通じる痛い諷示が多分に含まれてゐて、主人公役テッド・ルイスが奏するクラリネットの妙技以外に、深い興味がある。

筋としては、ハンガリイから亞米利加へ渡つた老音樂家一家の宿命を描いたもので、父のヴイクタア・モルナアルが皇帝から贈られたヴイオロンを、背に腹はかへられぬ一家の窮乏から、これもヴイオロンの研究生の息子が質屋に持つて行く。そして、ひそかに盛り場のヂヤズ團隊に身を投じて、お得意のクラリネツトを吹く。ところで、彼の持て方は、眞面目た音樂家顔色なしだ。…彼は盛んに儲ける。從つて、藝術的良心一點ばりの父の慨嘆にもかゝはらず、彼の一家にはやがて樂しい平和が到來する。と云ふ、例の亞米利加式甘物でありながら、しかもあながちにさうとのみ片附けられないところに、一寸したわたしのいはくがあるのだ。――

持てぬ純音樂からヂヤズに走つて、しこたま金をまうけた息子、及び、それによつて潤された一家はまづまづとして、一方、たとへ持てなくても、儲からなくても、只專心、純音樂に刻苦精進する篤志家の群は、彼らの窮迫ぶりは…一たいどうなると云ふのだ。水とパンとにさへ迫はれながらも、彼らは依然としてその立場を守るだらう。しかも、より蔓延するヂヤアナリズムの傳染菌は、日一日と彼らを脅かし續けるだらう。僞物が榮えて本物が衰へる。この不條理を、この矛盾を、どうすればいいか。

これを大衆を目的とする娯樂の色々について考へ合せても、單に面白いだけでは、吾々

約束

サモブヰトニツク

小畑一郎譯

あくまでも、まつ直ぐな、烈しい
しつかりした者となることだ。
同志の勵ます力强い言葉で
心を燃燒させねばならない。
悲哀の中に炎の勇氣を浴かしこんで
勞働と鬪爭！
そして遂に朗らかに歡聲をあげる日が來
る。
敵の襲擊を前にして

の主張する娯樂の意義には毛頭も觸れない。面白いだけなら、露出をどりもけつこう、鼻歌、すてばち、何でもけつこうだ。しかし、いやしくも吾々が欲する娯樂なるものには、それを見聞する吾々の心に、すくなくとも明日の希望をかきたてる何らかの要素がなくてはならない。——哄笑、明朗、淸新、それが巧みに闘爭的分子と合體したものこそ、吾々のいはゆる娯樂の意味からおして满點ものだが、とにかく多少の不滿は忍ぶとしても、吾々は、彼のどうなとなれ式の消極的氣持を助長する娯樂に對して、かりそめにも寛大にはなれない。ことに、世の無產者相手の娯樂が、彼らに强ひる二重の課税（精神的、物質的）に思ひ至つては、その當事者の罪の赦し難き、正に憎殺するも飽き足りない。

全く、不幸にくらんだ彼らの眼に、無責任な娯樂の誘惑が、いかに粘着力に富んだ蜘蛛手をひろげるか、彼らはてもなく敗北する。なけなしの財布をはたく、おまけに、たださへ乏しい闘爭力と生活力とを臺なしにする。さて、彼らの明日を考へても見よ、だ。赤い舌をぺろりと比叟笑む者は、單に娯樂の當事者のみではない。

これは、近來盛んに刊行される一般向きの出版物についても、その儘演繹される——金貨の化物ヂヤアナリズムは、つひにせり賣りの口上めいたものにまで、藝術の假面を被せる破廉恥ぶりだ。やれ何叢書、何々叢書と、あたりはただもう三十錢本、五十錢本の山又山だ。まさかと買ひ被つた屋臺骨のがつしりとした（見つきは）大出版屋までが、よせばいいのに大道藝人を呼び止める。そして、あらうとか、流行ぶしや、泥鰌すくひを御披露させると云ふ血迷ひ方だ。これも、客引き、客留めの止むを得ぬ手れん手くだなのだらうか、南無！

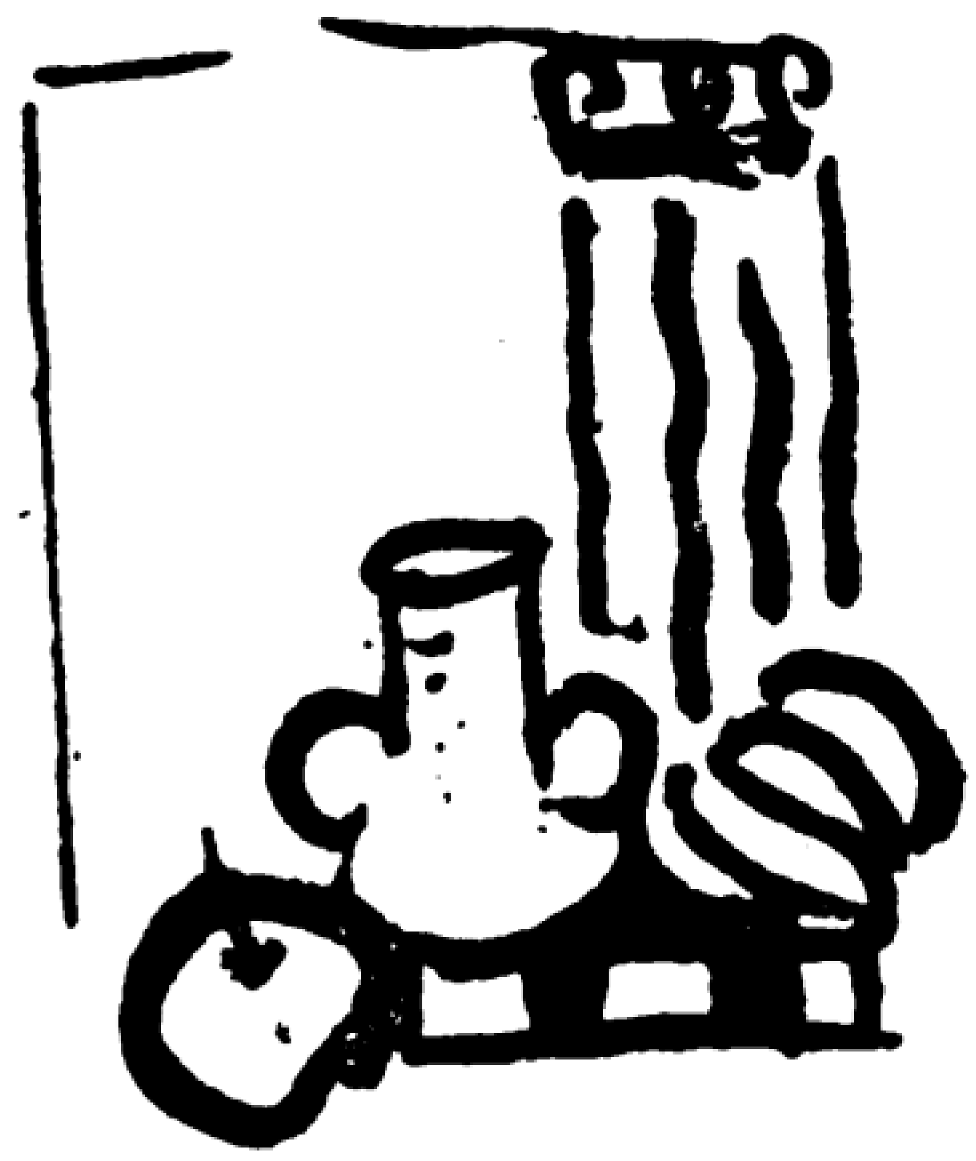
一方、お座敷にありついた大道藝人らは、藝は身を助けるものとばかりに、黃色な叫びを番頭にヂヤズるは、ジヤズるは、果は大事なところまでめくるは、見せるは、不景氣知らずの女性の恥を賣り物に、節操、道義心、何ものぞ、咄！インテリ消え失せろ、と、正しく紅塵萬丈のすさまじさだ。

とにかく、中みの檢査の肝要なこと、娯樂とつゆ變りがない。

怖れて胸を避けてはならない。
この暗い生活に
この變な顔つきの生活に
たゞでは力が與へられないのだ。
闘爭、
そして闘爭の中で斃れるだらう。
それを知つてゐなければならぬ。

怖るゝものゝないまなざしで
彼方をはつきり見極めねばならない。
そして死に臨んでは、確固として
勞働の不死を信じなければならない。

× × × ×



身邊記（隨筆）

英美子

僅々五十里の汽車の旅が、お話にもならないほど億劫で、兩親の墓參も出來ないとは、何としたことか。

靜岡まで――貳圓五拾何錢――池袋から省線で東京驛で東海道線に乘換へさへすれば四時間餘りで、碌に纏つたものさへ讀む間もなく行ける距離だのに、もう三年も歸へることが出來なかつた。

六月下旬飛行館で出演される或るステーヂに、佐々木千織といふ藝名で立つてみる豫定で、エロキユーションも二三度やつてみたし、今の今までそのつもりでゐたが、一寸考へるところがあつて斷然中止する決心にした。が、最近某社の婦人部に關係するかも知れないので、少しばかり忙しくなる豫定でゐるから、この間に一度と思ひ立つた。

ねえ……私は、年とつた女中に呼びかけた。

「私は、是非一度墓參がして來たいと思ふのだがねえ。」

「いつてらつしやいまし、老人のことですから決して坊ちやんを寢冷えさせるようなことはしませんから、一日や二日なら……」

「さうかい。じやあ賴んでいつて來ても可いかい。」

「御安心なすつて……」

「では、明日の晩は坊やと一緒の蚊帳に寢すんでをくれよ。能く煽いで蚊帳に出入するようにね。蚊が這入ると起きるからね。おまるを入れるのを忘れないように。お前がねる時一度おしつこをさせてお呉れ。默つてさせるのだよ。でないと聲で氣がつくからね。若し、母ちやん？といふやうだつた

ら、お母ちやまは勉強にいらしつたから、ねんねしてゐると好いお土産がありますよ。つていつてくれゝば必つとおとなしく眠るから……若しもむづかつたら、お菓子の棚に、買つて置いたシヤベルと、風船と、舟があるからね。決して果物や餡のものはやつてはいけませんよ。」

思ひ立つたが吉日、明日行くときめる。に就いては、先例を破つて、土産物一切全廢のこと。お義理の挨拶廻りも一切失禮のこと。必要以外の持物を省くこと。斷髮にしたから櫛道具も不必要だし、小型のスーツ、ケースに石鹼、はみがき具、クリーム、粉白粉、タオル、ストツキング一着、雨雀氏著の「若きソヴエート●ロシア」一冊、萬年筆、名刺、手帖、鼻紙、ハンカチ、サンマー●ケープ。旅費。——

俄に思ひ立ちまして、鄕里へいつて參ります。×日迄には必ず歸京いたします。

×

×社のH氏へ明日途中から速達を出す用意をする。

紫陽花の、朝庭に降りる。蔓つてゐる糸薄を中途から刈る。不在中に子供に手を切つて貰ひたくないから。青蛙が二匹、大方兄弟らしい。一枚の青桐の葉にちよこんと向ひ合つて睨み合つてゐる。一日二日忘れてゐた間にタネコノ（三歳の兒の筍の特名詞）が一丈にものびてゐる。

タネコノの、タネコノが
こんなに大きくなつたよ。
母ちやんの、タネコノも
こんなに大きくなつたよ。
好い子になつたよ。

濡椽から手をのばして筍をゆさ〳〵ゆする兒を膝に抱き上げて、心から一晩か二晩の留守が安じられる。この二三年何處からの講演會もお斷りして來たのも、小旅行にも出得なかつたのも、片親で育てゝゐる兒が案じられるからだ。

詩友の×さんなどは、私に子供のあることを

「貴女の藝術にとつては、不幸ですね。」

と云ふけれど、私は決して兒を有つたが爲の煩らはしさを不幸と思つたことはない。女性が男性と異る點は、懷胎し、生むといふ二點にあるのだ。女は、母となつて始めて女人といふものゝ全部を知り得るのだ。終生兒をもたない女性は、母といふ體驗、乃、女人の一分野を知らずに終る。

私は、幾人かの兒を生み育てゝ隨分苦しい辛い思ひを骨まで浸むほど味つて來たが、母としての名稱下にアーティストとしての自分を不幸だつたとは一度も考へたことはない。現在の社會組織から受ける、又は、回避することの出來ない私の境遇に寄る、不合理、不當然な事情の下に、血をしぼられるやうな思ひをして、吾兒に生別もした。或は、此世に産れ出ないうちから、父といふ者に裏切られた兒の母として、鐵火の喘ぎを忍び續けながら、一つの自尊心と光明心と、燃え立つ義憤とを以て、現在の兒を育てゝゐるが、決して私自身をば不幸であるとは思つてゐない。寧ろ………(省略)

若しも現在私に兒といふものが無かつたならば、平面的な仕事の上では、或は幾層倍かの仕事を爲し得るであらう。が、藝術とは、生活以上のものだらうか。藝術とは、地上を離れて爲さるべきものだらうか。

私は、現在の苦しみを何處までも苦しんでゆかうと決心してゐる。責任を放れて何處に安意の樂園があらう。「他人の苦痛の上に立てた幸福は、決して眞の幸福にはならない。」ストリンドベルヒが、ダマスクへの中で作中の人物に言はせてゐるように。

私は、あらゆる欺瞞を怖れ、最も輕蔑する。

×

横濱あたりで、ふと顔を上げると、實に愉快なお爺さんと、私はひざを打ち合せてゐた。お爺さんは倒れないようにと菊正宗の壜を膝小僧で突つかひながら、懐中を探つてゐたが、一つの小さな紙袋を取出した。それから新聞紙の端を引裂いてプテイツト・スプーンに折つた。それで紙袋から粉薬でも服むやうに何か抄ひ出しては口に入れる。そして、チビリ、チビリ私は、香ひと色からそれが、唐辛であることを知つた。大船で、小娘がお爺さんの隣席を占めた。

どこまで――

やまきた――

頗る簡單に二人の會話は終つた。娘さんもトンガラシにはきつと驚いたらう。

娘さんも、お爺さんも、兒を置いて來たダンパツの女も、心々に何事か考へながら、照り入梅の曇り空をみてゐる。鬼足袋、×ミルク、××モートル、××キヤラメル、卯の花、馬、月見草、水車、トンネル、が、車窓を飛んでゆく。

箱根山のつゆくさ

たそがれ、光る
むらさきの、露草。

遂々、雨になつた。昔、若い人と同棲してゐたころ、不孝な娘の所へ屢々父は訪れて呉れたが、故郷へ來いとは決して父は云つて呉れなかつた。こんなことを考へながら前のお爺さんを見ない振して見てゐると、眞んとに自分の父に似て來るのだつた。

お爺さん汽車のお酒はおいしいでせうね。一つお酌して上げませうか。――と眞當に思ふけれど、お爺さんは、トンガラシを食べるのを何んだか私に遠慮してゐるようにみえる。默然と四時間に近い同車。

どこまでお出ですえ？

えつ！　私？

ふいにお爺さんの方から高聲に口を開いて呉れた。私は、ニツと笑つた。沼津だつた。

靜岡まで――

へえ靜岡ですか――

お爺さんが丁寧に頭を下げて呉れたので、私も、まけずに丁寧に頭を下げた。何やら私はホツトした。お爺さんもきつとそんな氣持ちだつたらう。車中の退屈してゐた人々が一せいにこのコンドラストへ好奇的な視線を向けた。

×

俺は興津までだがね、東京の息子のところへ行つた歸えりでさあ、東京は氣候が惡いね。孫が病氣だといふので心配していつたでさあ。――この汽車あ、興津には停らないでの。江尻まで乘りこして引かへさにやなりません。

お爺さんは興津ですか、では淸見寺下の乙さんてご存知じやない？

乙さんなら、知つてるどころか、心易いでさあ。あなた…？

私はね、乙さんとこの娘のやうにして貰つてましたの。今度は、寄れないかも知れない……。あなた傳言して下さらない？

へえ、良ござんすとも――

私は、わざと名刺をお爺さんに渡すのを止めた。

よろしく云つて下さい。東京に遊びに來るのを待つてるつてね。あのね、頭髪を切つて洋服を着てゐたといつては解らないことよ。東京の奥さん、だと云つて呉れゝば解りますか

らね。

へえ、よろしうござえやす。

私、髪をこんなにしたのは遂この頃なんですからね。

どうも仕方ない。

お爺さんの返事は素晴らしいではないか。――どうも仕方ない――は何が仕方ないのか。實に愉快だ。

×

昨夜、貴女がお歸へりになつてから、俄かに思ひ立つて、いま歸省の途中です。墓參を終えたら、靜岡ホーム（孤兒と託兒、百名程をみる）をお訪ねして、三保學院（不良少年の感化所）を視せて貰つて、ぢき歸京いたします。一度、若しお暇がおありでしたら、兒供のところを訪ねて下さればありがたいのですが。

Kさんへのこの葉書を三島驛で驛員に托す。

最急行「富士」の清雅な食堂、落ちついた寢臺車のカーテンが、私の窓を掠めて去つた。

× × × × × × × ×

婦人セトルメントだより

私たちがよい仕事を與へられた事をまづ感謝したいと思ふ。

本所林町に今度提供された、「家」は敬隣館（一燈園系統の關係）で使ふつもりで建てられたものであるが、何かの事情で落成してから一年あまり釘づけにされたまゝ放置してあつたのを、どうだ、使つてみては？といふお誘ひであつたのだつた。

それには現在の敬隣館勞働者宿泊所主事の横山秀英氏――氏は長野にゐられる頃から、私の消費組合主義に共鳴して下さつていろ／＼お世話になつてゐた關係がある――には一方ならぬ御盡力にあづかつた。

何しろ荒けづりなバラックの家と來てゐるので、初め、千圓位造作費をかけないことには使用することが出來ぬ、と大工さんから云はれた家を、百圓内外でとにかく住める様に、やつてみて下さい、とムリな條件を持ち出して、私たちは掃除に出かけた。總計八人。尻はし折りの手拭被りの姐さんになつてみんなで水を流して掃いたり拭いたり。百坪といふと、女手には相當厄介な大掃除である。持參のお握りは、手傳ひに來てくれた近隣の子供たちへ一つ宛の割にもゆき亙らなかつたので、もりそばを屋根のやうに積んで「腹がへつては動かれない」と、みんなで大いに健啖振りを發揮した。

一年以上も閉ぢたまゝだつた家の戸があいて、それも妙齢の女が澤山現れて、赤襷で大掃除を初めたのだから、近所の男も女も子供もびつくりして、「何が初まるのかね」と聞きに來た。

「そんなとこで見てゐないで手傳つてくれない？」と鎌をかけると、

「オーライ」

「さつきからさうくるのを待つてたんだ」と來た。あとから／＼と二十人程の子供の臨時手傳が殖えたから、ガラス戸を拭く布が足りない、雜巾が足りない、バケツ、箒が足りない、と、いや大變な騷ぎになつた。

さしあたり私たちの計畫としては、

金子のかゝらぬ仕事を初めること、

適役の人の在る仕事から初めること、

收入になる仕事に着手すること、

に一決して、

一、產兒制限相談所の設備――通り、これにはよい醫師と產婆があるのでこの「家」の誇りの一つ。

二、子供の復習會　非常に熱心な教育者が胸を躍らせて仕事の初るのを待つてゐる

三、裁縫塾

四、婦人夜學校

五、家庭婦人のための家事實習會

何れも、適任な人がそれ／＼に案を進めてゐる。

おひ／＼してゆきたい仕事に託兒所があり、圖書閲覽室があり、音樂體操會あり、消費組合のり……私たちはよき協力者が澤山に出來て、この「家」一つでは不足となつて第二、第三、第四の「家」があちこちに初められるやうにと念じてゐる。

經營は一切自治と協力主義。みんなで働き合つて、貧乏をし合つて積みあげてゆかうといふ方針。だから適任な人があつてぜひ一緒に働きたいと申込まれても、その人に事情があつて、その人ひとりの食費と電車賃の外に余分な必要があるといふ様な場合、折角の働き手を斷らねばならぬといふ悲しみがある。

『あの聲だ』

笊の中の里芋さへも
時にはヤケをおこすもの
「この窮屈が分らんか」って
が五本の指には耳がない
「殘酷だ」とは「里芋のみぞ知る」である
いと靜に陽が蜜柑色に沈む頃
非生産的な家の灯もともる
瘠せた亭主が雁首ふつて
「俺」の空腹を吐き出す時
鍋の中から悲鳴があがる
おゝゝ！
何と皆んな其の聲を聞いたか

白馬登山

昭和二年夏、信濃大町より木崎湖、靑木湖を過ぎて、四谷に至り、白馬館にて仕度をなし、それより白馬岳、杓子岳、鑓ヶ岳に登る。

○雪溪の下より沸つ荒渦に丸本の渡し這うてこえけり
○イーデンの園生もかくやと覺ゆお花畠のうつくしさには
○いたゞきに立てば登仙の思ひしてしばしたまゆらうつろになりけり
○汗出でゝのぼりにけるもいたゞきは雪の風にて手趾すくみぬ
○七千尺雲海にそびえし鑓の湯にひたりておがみぬ御來光の幸

燕岳より槍・穗高の縱走

昭和四年夏、有明より中房温泉、燕岳、大天井岳、西ヶ岳、槍ヶ岳、穗高岳の縱走より上高地に至り、梓川の溪谷に沿ひて中の湯を越え、白骨温泉に至る。

人！　足！　人！で足足足だ
權利が、地位が、財產が
わめく様にかみ付く様に
叩き付けて蹂躙つた
幾年の此の世の中だ
今じやア赤肌の素足ばかり
どうしてこの地が蹈まれるものか
惡臭と濕氣と暗闇の中は
あかえの骨の様なオルガニズムだ
土妙降りの雨の夜
おゝゝ！
何と皆んなあの聲が聞えたか

武田濟子

×　×　×

○燕岳大天井や西ヶ岳、槍・穗高へて白骨の湯へ
○ほの〴〵と西岳小屋はあけそめてアルプスの諸峯明ろうなりぬ
○すごきまで雄々しかりけれ槍ヶ岳黎明の寒さにすみ渡りて
○ピッケルも殺生小屋にのこしをき身一つになりてのぼる槍岳
○うつし世に生きなん思ひ强うして綱手ゆるめてためらひつ吾
○いたゞきに登れば連峯まのあたり迫りてはるか日本海も見ゆ
○頂のながめも美しさながらにパノラマの繪といへど足らはず
○上高地牧場の牛馬うちつどひ林をありく自然のゝどけさ
○大正池うつるけむりの燒岳は白樺の影とならびてぞ見ゆ

新井愛子



プチブル崩壞期

加賀谷政子

東北の大地が氷にとざゝれ吹雪する或る日の朝だつた。青白い老いた父の憂鬱な顔は、私を涙ぐませるに充分だつた。朝ごはんのおへた後、父はこんな事を云ひ出した。

『お前が今月で退社しなければ、カンドウを着せる……そうなつたらお前の自由な道を歩いたらいゝだろう――親としてカンドウ着せた以上はかまわぬから』

父はこれだけ云つたきり何も云はなかつた。

カンドウ――

カンドウ――

私は口の中で、幾度も繰り返して見た。繰り返して見るたびに私の心は反動でいつぱいになるのであつた。

ボロ、ボロ、ボロ、涙は燦然と流れた。

私は灰色の冷い部屋で考へた。

プチブル崩壞とプチブル根生――これほど慘な生活はない。そうした生活が私をいつも精神的自殺者としてしまふのだ。

× ×

私は父の氣持をよく知つてゐた。父の氣持を知つてゐれば居る程、私の氣持も知つてもらひたかつた。

『何んて理解のないお父さんでせうか』

私は一人でつぶやいて、カンドウ、と云ふ意味に對する、父の氣持を考へた。……ホウケン氣分のぬけきらない父の考へは、女が職業を持つて一生生活出來るものか、女は女らしくつゝま

しやかに家庭にいそしんでゐればそれでいゝ。そのうちに人のいゝお金のある人と結婚でもすれば、女の成功と思つてゐるのだつた。……

考への相違、私はそうした考へだけでも腹の底から嫌ひであつた。

現在の内部的生活が如何に苦しくとも外部的には平然とプチブル階級の一人として交際してゆきたい慾望にかられてゐる父の間違つた考へ方を私は悲しまずにはゐられなかつた。

私は、新聞社に入社する前だつて、父から一文の小使ひだつてもらつた事はなかつた。私はいつも他人のお裁縫をして家庭の小使ひを得た。父は大きな負債を背負つて、廣い店をたゝんだのだつた。

東北の港の一隅にはまだ寒いシベリア風と不景氣風とが戰つてゐた。

一日一日と私達の生活は苦しんでゆかなければならないのは、當然であつた。税金はかゝる。負債の利息はふえてゆく。交際は以前と何等かわりないのだつた。

私はさうした、沒落の地上をみつめて箱入娘として歩んでゆく事が出來るものでせうか。いや、私は、如何なる障碍とも戰つて、自己の生活を求めなければならなかつた。

『あゝせめて、父が十分の一でも私のかうした氣持を知つて呉れたら、私はどんなにうれしかつたか知れない』

一人心でつぶやいて見たが、何にもならない。たゞ涙となるのみだつた。

× × ×

吹雪はます／＼荒れ狂ふた。工場のサイレンと共に、冷い鐵筋の扉から吐き出され町へなだれ込む多くの勞働者達は、吹雪の中を狂人の如く家路へと急ぐさまが、私の部屋の窓をフヰルムの如くかすめた。

一九三〇年（生活の一端より）

お願ひ

今月號からこの「讀者のページ」を設けました。「見たこと、聞いたこと、感じたことを、仲間のみんなにも知らせてあげよう」さう云ふ親しい氣持で書いていたゞけるとほんとにうれしうございます。どうぞ有效にこのページを利用して下さい。



生活の一端を見る

西野いく

人を數へるなんて大それた事は、もう決してすまいとは思つてゐますが、小さい人達と共にする生活の樂しさを、私はどうしても忘れることが出來ません。鬼ごつこでも繩飛びでも、肥つた私には隨分苦しい藝當ですが、それでも子供達と一緒なら、我を忘れてやれるのです。學生時代に二三回試みたけれど、到底私にはやれないものと見極めがついたので、それつきり振り向きもしなかつたスキーでさへ、子供達から何遍もすゝめられて、つひ買はされてしまひ、大枚三圓六十錢のそれを、曲つた脚にあぶなつかしくつけて、子供達に兩手を引つ張られながら、低い坂を練習しつゞける私でした。轉んで動きがとれなくなつてしまふと、子供達がよつてたかつて助けおこしてくれました。「オヴアー・ザ・ヒル」の話を聞きながら、泣いてゐる子供を見ると、數年前にそれを活動で見てゐた時の、自分の感激を新しくしながら話しつゞける事が出來ました。暑い盛りに行はれた、近くの聯隊の演習を見て「戰爭のない世の中が欲しい」と綴り方に書く子供もゐました。

子供が無能力者だなんて、一體誰が言ひ出したのでせう。體の自由がきく限り、白痴でもない限り、皆それ〴〵の生活と、それに對する相應の自信をもつてゐる事を、私はながく見續けて來ました。

あゝ子供が私の手にはおへないと思はれる時には、私はフランスの首府が、ロンドンでなくてパリーだといふ事を覺え込まさうとして一生懸命になつてゐました。海を見たことのない子供達が、そこに育つ海藻や、小さい動物の事を理解するのがおそいといふ事で内心すつかりぢれてゐました。

小さい力を十四等分して、その一つびとつを違つた學課に割當てる、それは鼠の生活見たいに忙しいのですが、健康な體を思ふ存分驅使する事は、決して不愉快ではありませんでした。しかしその上人數に應じて五十等分するだけの餘裕が私にはありませんでした。ですから比較的幸福な境涯に生れた子供達だけが、私を利用してくれたようでした。物質にも、時間にも、從つて氣持の上にも、少しのゆとりを持たない爲、それの出來なかつた大勢の他の子供達、彼等は一體どこへ行くのでせう。

勉強した爲に兄に叱られた經驗を持つ私、學校ごつこをしてゐる時、背中に居る妹に泣き立られて、本を中途で讀み止めなければならなかつた私、それにしては今までの不合理な生活に對する目覺めの、何ておそかつた事よと、この頃はよく考へさせられてゐます。

職業婦人社の手で經營されるセツトルメントが、近く本所に出來ようとしてゐます。私はそこで小學校へ通ふ小さい人達と一緒に、復習會をする事になるでせう。そこでは別にこれだけは是が非でもつめこむ樣にと强要されてはゐません。子供達の心易い相談相手としての役割りを、よく果さなくてはと意氣込んでゐます。



眼について思ふ

越智芳枝

眼のうつくしい人を見る度に、私はほんとうに羨ましい。小供は小供らしい無邪氣な輝きを……、處女は處女らしい清純なきらめきを……、人妻は人妻らしい溫容な眼を……、慈母は慈母らしい慈愛に滿ちた濕ひを……、それ〲の、ほんとうの光りを持つてゐる眼に接するとき、私は尊いものを見出した樣にうれしい。美人、不美人にかゝわらず、その人の正しい心の生活がその眼に表れてゐる時にのみ、この味ひを味ふ事が出來る。

その日その日の生活の戰ひに疲れて、げつそりした額を鏡に映してみる日の多い私は、自分ながらあさましい氣がしないではない。その瞼は焦瘁して張りがなく、眼はするどく劍を含み、濕ひなんて更にない。人妻らしい溫容さ、二人の子の慈母であるべき慈母らしい濕ひや何處？ である。

つまりこれは、自分自身の毎日の生活に對して、自信と、希望と、感謝を持つてゐない所以だろうと思ふ。だから或る日もしも、自分の仕事に何等かの希望が持て、自信と信賴に滿ち〱て居る日の眼の輝きはどうだ。眼自身が希望に燃え、見るからに幸福さうで、接する人々を愉快にする。たゞ現實的な疲勞と焦燥としか表れてゐない自分の眼を見る度に人格的になつてゐない自己を恥づかしく思ふ。

俗に「眼千兩」と云つて、美人の第一標準を眼に於いてゐる人さへある程、眼の美しい事は美人の一つの條件にもなつてゐる。百萬の言葉にも增して、意味深い無音の言葉を投げ與へるのもこの眼だ。

しかし、例へどんなに美人であつても、かの遊廓の女の性的に濁つた眼、獨身男が性的衝動にかられて度々の不謹愼な××が及ぼす眼のよどみ、淫亂な未亡人の黒くくまの出來た眼、その人の性的な一面をもその眼に見ることが出來る。

電車などの中で、キヨロ〱と人を盜み見る樣な癖のある人に油斷してはならない。うつかりすると掏られるからだ。瞼が厚く、それが眼玉の上に垂れ下がつてゐる樣な人は、高利貸をすれば必ず成功すると云はれる程、强慾無類の人であるとか、物質的一面をもその眼は語つてゐるのである。

生れつき眼の美醜もさる事ながら、その人の人格的修養によつて得られる心の輝を添へて、初めてほんたうに美しい眼になるのだと思ふ。あらゆる苦難を經て、その眼は深刻な人間相を映し出し、然かも、希望と感謝と自負に燃える眼の持主になるまでには、可成り修養と試練を經驗しなければならない。

かくて、眼こそは外的には美人の一條件となり、內的には人格の表れとして、重要な役割を持つものとして、私は接する人毎に先づその眼に索きつけられるのである。

本を讀め！



おすゝめしたき本

▲産業合理化と如何に鬪ふか

（世界社版　定價五十錢）

産業合理化は、極度に行詰つた資本主義の最後的な頼みの綱である。此合理化運動に向つて如何にプロレタリアの位置を守るか？　また如何なる大局的見透しを以て此の合理化運動と鬪ふか、此等の問題に對して我國社會運動の各方面を代表する、赤松克麿、高橋龜吉、細迫兼光、野呂榮太郎諸氏の眞摯なる論説を輯錄したものが本書である。

産業合理化の本質的暴露と、それに對する社會民主々義左右、マルクス主義左右の論評を一括したものとして、特に興味ある著作である。

▲ソヴエート經濟五年計畫とは何か

（世界社版　定價五十錢）

ソヴエート經濟五年計畫は、社會主義建設の現實問題として世界の視聽を集めてゐるばかりでなく、それは勞働階級にとつて重大なる社會的希望の集中的表現でなければならない。これが成功と失敗とは、世界プロレタリアの解放に運命的影響を及ぼすもので、我國プロレタリアにとつても、直ちに理解と研究とを要する問題である。本書は、豐富な寫眞と、平易な敍述とで五年計畫の内容と意義とを說明してゐる。

▲教育戰線

（上田庄三郎著）

「教育界には、從來さまざまな新思潮や新主義が、送迎に遑なく押しよせて來た。が要するにそれ等のものは國家といふ巨大な教育資本の下に發生した新主義販賣を專業とする小教育資本家にすぎない」と著者がその序文の冒頭で云つてゐるのを見ても解るやうに、此書の意圖した處は、それ等の御用教育書とは自ら別個の觀點に立つた、無産階級的立場に寄る處の新しい教育思想の論策であり、論陣である。その内容に關しては著者自身、自分のプチブル的觀念形態に對しての初歩的教育戰線であると正直に云つてゐる樣に、階級理論としては自然發生的な憾みがないでもないが、それだけにその具體論は、現在の教育界に對する切實な論策として傾聽に値するであらう。

（自由社版　定價七十錢）

▲象徵の烏賊

（生田春月遺著）

先頃、世間に異常なセンセーションを遺して死んだ故生田春月氏の遺著である。敗むる處のものは故人が死の決意のもとに身を以つて書いたその最後の詩作を集めたもので、幽邃、靜寂、典雅、そこには、詩人

本を讀め！

春月の渾然として玉の如き、金玉の文字が刻みつけられてゐる。蓋し明治、大正を通じての偉大なる詩人の一人としての著者を知るまたとなき唯一の書であらう。裝釘の莊重、華麗、また著者の最後を飾るものとして、一見讀者の胸を打つであらう。

(第一書房版　定價二圓)

▲海　國

(生田春月追悼詩集)

故人の知友、門下の集めた追悼詩集で、故人の面影を忍ぶと共に、その周圍の美しい友情を知る可憐にして、哀切を極めた好個の讀物である。

(交蘭社發行　定價一圓二十錢)

▲裝甲列車、パルチザン

(イワノフ作)
(黑田辰男譯)

原著者イワノフはソヴエート・ロシアに於ける所謂「同伴作家」として知られ、後その同伴的要素を淸算してプロレタリア作家として更生した人である。「裝甲列車」は劇化されてソヴエートの劇壇を震撼させたものとして有名である。裝甲列車、パルチザン共に、彼のブルジョア諸國の全世界的なデマゴーギによつて、鬼の如きものとして野獸の如きものとして、記憶されてゐるパルチザンを主材としたもので、果してその現實の姿はどんなものであつたか、何故彼等が現れたか。彼等がいかに行動したか。又それが何の爲めであつたかと云ふ事を、讀者はこの小部によつて知る事が出來るであらう。

譯文の嶄新にして、巧妙、流石にロシア物を多數手にかけた譯者だけあると云へやう。

(マルクス書房版　定價一圓)

▲叛　亂

(ドミートリー・フルマー)
(ノフ著　小宮山明敏譯)

フルマーノフの「叛亂」は、一九二六年トルキスタン自治社會主義ソヴエート共和國の暴動を題材としたもので、作者フルマーノフは當時對暴動臨時作戰本部幹部として活躍した人だと云はれてゐる。文學形式としてはまだ「記錄小說」の域を脫してゐない憾みがあるが、それだけにその記述の正確なる點は驚歎すべき程で、或過程に於ける過去の鬪爭の正確な記錄としては他の追從を許さない獨自な價値を持つてゐると云へやう。

(マルクス書房版　定價一圓)

▲結婚と新道德

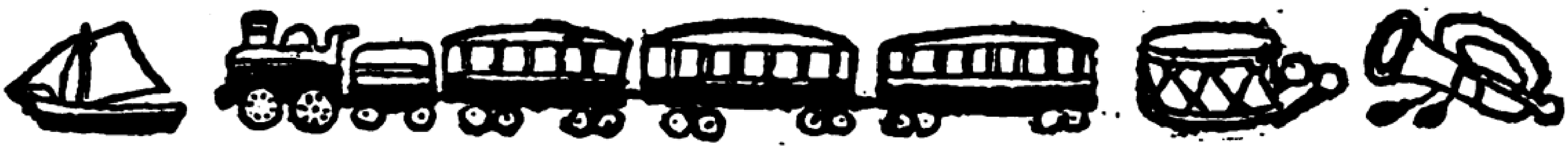
(バートランド・ラッ)
(セル著　福永渙譯)

(アルス版　壹圓二十錢)

内容前號紹介

本誌を育てゝ下さる皆樣の便を計るために、職業婦人社事業部に於きまして以上の書籍を取次致しますからどうぞお申込み下さい。

職業婦人社事業部
振替東京六四一六〇番



童話

とびと原つぱ

大友チイコ

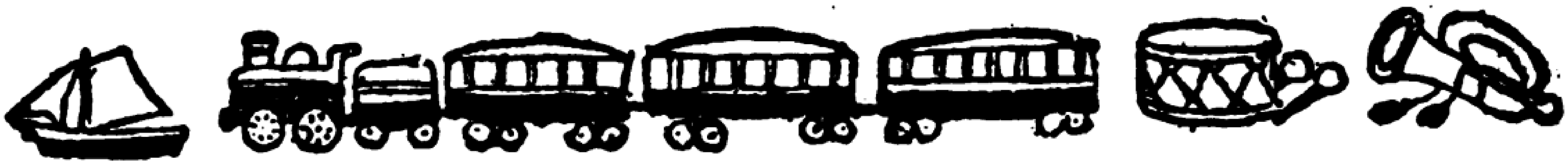
群青の空の晴れた日です。一羽のとびは中空に輪をゑがきながら、人間の住む所を見下して笑ひました。

『何といふちつぽけな奴等だらう。あれ〳〵彼麼、あれでも大きな家を建てた心算でか、偉大な吾等の力だの何だのと屁理窟を云つては誇つてゐる。更に彼麼なものでも自分達人間の力の偉大なことを信じて、無數に穴から這入つて行く。……いまに大地がゆるげば又もめちや〳〵に定つてらあ、あゝ何といふあわれな上にもちつぽけな者たちであらう。ふん俺樣なんさあ、彼麼ちつぽけなものなど、此の眼中にはない。彼の向ふに連なる山々、春夏秋冬一年中純白の壁を着けた偉大な大自然の建築物は、ふん、俺樣のものだ。』

とびにとつては、山も川も町も村も皆建築物だと思つてゐるのでせう。

『ふゝん』とせゝら笑つたかと思ふと、更に大きな輪をゑがいて、

『彼麼ちつぽけな人間の作つた建築物へなぞ、俺は糞をすることも出來る。俺が糞をしたら人間は御丁寧樣にも俺の糞を掃いて拾つて捨てゝ呉れるであらう。ふん、俺の糞の存在さへ氣になる程、彼等人間の建物などちつぽけなものだ。俺は幾度あの山の麓へ行つて糞をし、子供を幾ら育てたか知れやしない。けれどもあの大自



然の建物は、俺の糞や子供など眼中に於いてない。而してあの大自然の建物の偉大さを見ろ。あの建物の、あの山の白雪の眞似をした白壁にして見ても、眞似ることは出來まい。あの大自然の建物はそして俺等のものだのに人間は無斷で材木を盗み去る。大自然の盗棒だ。

更にあの人間の顔、あれは何だ。丸い石ころのやうな頭に、さつま芋の樣にひよろ長いものが左右と下にあつて、歩いたり仕事をしたりする。またあの頭といふ丸い石ころのやうなものゝ眞中には、三角なものがあり、下には小さな穴が二ツ、臭ひをかぐ鼻だといふ。鼻の下に口といふのがあつて、おしやべりをしたり、物を食つたりする。食ひしん棒は何時もあの口をもぐ／＼さして、何かほゝ張つてゐる。鼻の上の兩側には口の細長いやうなものがある。目だといふ。ものを見るのだ。中には物好きにもガラスと針金で作つた輪をはめてゐる人間もちよい／＼ある。また石ころの兩わきには耳といふ、これまた變つたはまぐりのやうな形のものに穴があつて、物を聞くのだといふ。また時折頭のはげたのも面白い。あれ――何時の間にか彼麼に人間の子が大勢集まつた。みんな天上を向いて何かさへづゝてゐる」

とびは叉輪をつくつて原つぱの子供達を見下しました。

『と――びとろゝ、と――びとろゝ、輪をかけ輪をかけ――』

とはやしてゐるのでした。

『ふん、餓鬼共なんぞ面白くもねえや、チエッ』

つばをして、とびは彼方の空に向つて飛び去つてしまひました。

暫く子供達はとびの去つた森の方を見送つてゐました。陽はとつぷりと暮れたので、もう森の方も暗かつたのです。

何時か子供達もみんな家に歸つて、原つぱは石ころと雜草だけの世界です。

いまはもう、眞夜中、人間も、とびもお家に寢んでゐることでせう。



彼女等は何處へゆく

小泉せい

人物

院長

柳田　新任の看護婦長（結婚失敗者）

越智　柳田より後に來た見習

江崎　古参見習

立川　同

松本　中年の藥局生

（一）

日曜日の午後、診察室で柳田作業服のまゝ机に肘をついて兩手で顔を覆うてゐる。その横で越智は同じ白服のまゝ心配顔で立つてゐる。

越智　貴女は婦長ではありませんか。そんなに遠慮して氣兼ねしなくてもいゝ筈だわ。院長さんは御承知だもの。どうして、あの人達はあんな意地惡でせう。だから私、教育のない人は嫌ひだわ、無茶ですもの。

柳田　（吃驚して顔を上げる）そんな、そんな事云ふものぢやありません。同じ職業を持つてゐるんですもの、みんな同じことだわ。

越智　職業は同じでも精神が違ふのよ。乞食根性だわ、淫賣してゐる人だつて、もつと人間同志思ひやりがあるものよ。正ちやんが病氣だから貴女が歸り度いと云ふと急に二人で活動觀に行くなんて、なんて意地の惡い酷い人たちでせう。私一人で大丈夫よ、行つていらつしやいよ。正ちやんの爲

め貴女はこれだけの屈從を忍んで働いてゐるのぢやないの。若し急に死んだらどうするの。貴女、氣違ひになるわよ。

柳田（打ち伏したまゝ答へないで、だん〳〵悲しさうに萎れてしまふ）

越智　だから行つていらつしやいな、何を恐れていらつしやるの！　院長さんは、私が居れば怒りはなさらないわ。

柳田　……。

越智　日曜當直なんて、ほんとは貴女は仕なくてもいゝ位に思ふわ。あれだけ朝から夜まで細々働いて。江崎さんでも立川さんでも働くと損する位に思うてゐるのよ。あんな人相手に考へるだけ愚だわ。

柳田　私は何故あの人たちを恐れるのか自分で自分が分らないの（眼頭の涙を押しぬぐふ）隨分酷い事を云はれたり、されたりして、貴女が來るまで私はまるで生きた氣持ちはなかつたわ。正坊が正坊がつて、それだけを樂んでゐたわ。餘り辛いので、母子して死んで仕舞ふかと思つたことも度々でしたの。働かねば正坊の養育費が行き詰るし（顔を歪めて笑ふ）院長さまからは日曜度に正坊のとこへ行つていゝとお許しはいたゞいてゐるんですけれども、却つてそんな同情があの人たちに嫉まれていけないのよ。正坊が病氣だと端書が來れば、里の者と計り合せて嘘付くなんて云はれるんですもの。

越智　貴女が餘りあの人たちに遠慮し過ぎて恐れるから、そんなことを云はれるのよ。

柳田　さうなの。私はあの人たちのわからず家を恐れてゐるわ。道理の分らない人が私には一番怖いのよ。

越智　さうよ。貴女はあの人たちを恐れてゐるのでなくて、あの人達の無智を恐れていらつしやるのよ。いや、輕蔑していらつしやるのよ。さうよ、きつとさうよ。

柳田　さうかも知れません。そして私は私の短氣を恐れてゐるの。最後の爆發を恐れて、心の片隅で、相手にするな、相手にするなつて、用心ばかりしてゐるのよ。

越智　だからほんとはあの人たちを恐れてゐるのでなくて輕蔑していらつしやるのよ。馬鹿にしていらつしやるのよ内心では。でも外では全く反對の形だわね……。こんなこと云つてゐる間にあの人たちが歸つて來ると又面當臭いから早く仕度なさいな。

柳田　では、行つて來ませうか。（立ち上る）

(二)

それから二週間後、院長を往診に送り出すと、江崎と立川は診察室の机の前で立ち話してゐる。越智は試驗管を持つて奥へ入る。

江崎　正坊、正坊つて云つてゐたのに死なれて、柳田さんも少し可哀さうねえ。

立川　この時期にいつそ止めたらいゝわ。あんな年をして職業婦人もないものよ。

越智　(奥から出て來る)貴女たちは、どうして柳田さんの辭めるのをお待ちなの。

立川　お世話よ。貴女も如何？　殉情的に柳田さんと辭めた方が利巧だわ。

越智　どうしてそんな意地の惡いことばかり仰言るの。本當に意地惡ね。

立川　貴女こそ告げ口したり柳田さんの肩持つたり新參のくせに生意氣よ。

柳田　(入つて來る)何を云ひ合つてるの。

江崎　(惡く惡くしげに)お世話樣。

柳田　何んてはしたない人でせう。もう少しはおだやかになれませんか。

江崎　どうせはしたないですよ。越智さんの様に女學校出ではありませんからね。

越智　いつ誰が學校のことを云ひましたか。

江崎　云はなくてもさ、出てゐるわよ。人を馬鹿にして！　院長さんのお諂ひばかりしてさ、お妾ぢやあるまいし……。新參のくせに私と同じ月給貰つて、それだけでもうれしいわねえ。ねえ立川さん、どうせ私どもは産婆の資格だけしかないからお給金だつて少いのよ。猫でも杓子でも女學校出ならいゝのよ。あゝ口惜しいわ、夜も寢ないで勉强して免許とつたつて、こんな人に馬鹿にされるんだもの。女學校なんか、女學校がなんですか。

越智　私は貴女たちを馬鹿にした憶へはないわ。お給金なんか私知らないわ、院長さまが下さるもの……。

江崎　どうせですよ、女學校出なければお役に立たないとさ、女學校出るとお妾になれるとさ、ヘツ。

越智　妾？　誰が妾です。誰が、誰が妾です？

江崎　貴女つて云つてないわ、どこかそこらの人にきいてごらんなさい。

柳田　江崎さんツ(蒼く震へてゐる)變にからまつたことを云ひますね。妾とは何の事です。誰のことですか。お互は同じ仕事をしてゐて、どうしてさう思ひやりがないのでせう。

立川　越後の人間はどうせこうですよ。

柳田　何處の人間だつて同じです。今日はもう許せません、院長さまに申し上げて、處分して貰ひます。

江崎　面白いわ、新参が古参を處分するなんて、許さないなんて、誰の云ふことかしら、いばりやだわ。
柳田　意張ります。今日は完全に婦長の立場をはつきりします。
江崎　勝手にいばるがいゝわ、いくら意張つたつてあんたゞつて雇はれてゐるくせに……。
立川　随分酷い人ね、院長さんに云ひつけてやりませうよ。口惜しいわ。
江崎　癪だわ。(二人わめきながら出て行く)
越智(しばらく呆然と彼女等を見送つてゐる)大丈夫でせうか……
柳田　えゝ、私、もう正坊にも死なれたし、どうなつても構わないわ。仕事なんてどうでもいゝわ。もう〳〵私は坊やの様に死んでしまひたい。(ヒステリカルに云つて泣く)

二時間後、院長室に四人の看護婦の外薬局生の松本も加つて、院長に呼ばれてゐる。

院長　いま話を聴くところに依ると(順に皆の顔を見廻す)柳田君は江崎君を辭めさせるとか云つたさうだが、僕をさし置いて甚だ差し出がましい話だ。ところで、柳田君自身もやめると云ふし、江崎君もやめると云ふが、病院は急に二人一所に止されると困る。越智君もやめ度いと云つてゐる。まるでストライキだ。自分達で喧嘩して僕に迷惑かけるのは虫がいゝ。無責任すぎる。そんな人はみんな辭めてもらいたいが、差し當り困るし、患者に不自由させるのは不都合だ。誰か一人だけやめて貰ふことにする。立川君は、誰がやめたがいゝかね。
立川(やゝ躊躇して)柳田さん……
院長　越智君、君はやめないことにして、(やさしく)誰れがやめていゝか云つてごらん。
越智(活潑に)江崎さんの方がいゝです。
院長　松本君はどう思ふ。
松本　このことはこの場きりで我慢して、みんな辭めないがいゝと思ひますが……。
院長　胡麻化さないで、遠慮なしに云つて呉れ給へ。臭いものに蓋は當分だけしかもたないよ。此の場合だ、云つて呉れ給へ。
松本　いろ〳〵の點で、柳田さんは居られた方がいゝでせう。而し江崎さんも……。
(彼女等は奴隷が最後の審査員の宣言を待つてゐるかの様に次に來る裁斷を待つた。雇主側の感情と都合で彼女等の價値が色別され、そして支配される憤りを淡然と感じたが、而し彼女等はその强い忍從と妥協性とでうなだれて考へた。馘首されたつて構ふものか、女給にでも何でもなれる。嫁に行つたつていゝ。田舎に歸らう。死んだ方がいゝ。等々。
院長　ぢや江崎君は自分の希望通りし給へ。
江崎(憤然として)え、私はお嫁に行くことになつて居ります。(傲然と出て行く)

巻末に

新しい仕事が加つて、新しい元氣が充實して來ました。大石さんも、西野さんも、吉村さんも、みな大變な意氣込みです。セトルメントの仕事が初まつたからです。悉しいことは來月號で——。

　これから本誌上には、セトルメントの實際について有益な參考になる記事がのせられる筈であります。各地のみなさんの社會的協力のためによい暗示となれば幸だと思ひます。

×

　雜誌の宣傳をすることが相かはらず下手なので新しい方面へ「婦人運動」の存在を知らせることが出來ないでゐるのを口惜しんでゐます。これは、讀者のみなさんのお助力をえて、各地で何かの催しをする樣にしてゆくより外ないことゝ思ひます。讀者會、婦人懇談會などぜひお世話して下さい。出かけてゆきますから。

×

　そしてみなさんも、地方の都市で、農村で、それ〴〵にふさはしい婦人運動に入つてはしいものです。消費組合を助けるとか、セトルメントを起すとか、どちらも金子がなくても、暇がなくても協力する仲間さへあればやつてゆける仕事です。(むめお)

婦人セトルメントを助けて下さい——

　別項第　頁のごほりに私たちはセトルメント事業をもつこごになりました。心に加はる熱は、この上まだ〱盛りあげても、一層元氣にこそなれ倒れる心配はありませんが、新しい仕事が一つ殖えて、金子が要るし、時間をうばはれる。

　私たちごしては、この「婦人運動」の讀者をふやしてセトルメント事業の支えとしなければなりません。讀者よ、進んで婦人セトルメントに協力して下さい。

讀者倍加に加勢せよ——

○

　毎號どうやら期日に發行出來てこれから一馬力で發行日をもう少し早く出來ると思つてゐたところ、八月號が以外に後れて月の半頃になり、九月號と合併號を出すやうな仕末になつたとを玆に讀者の皆樣と執筆者の諸先輩に深く御詫申上げる次第でございます。原稿は七月の半に出來て印刷に廻したのですが、印刷所の都合と、編輯者の不馴れと、奥氏其他の旅行で、豫定が飴のやうに延びてしまいました。今後は極力豫定日を守る積りでゐますからぜひ御愛讀御協力を願ひます。(編輯者)

昭和五年八月十八日納本
昭和五年九月　一日發行

◇誌代はすべて前納にして下さい

誌代

壹部	貳拾錢（郵税一錢）
半年分	壹圓二十錢
壹年分	貳圓二十錢

編輯發行兼印刷人　奥　梅尾

東京市本所區林町二ノ七六
職業婦人社
振替東京六四二〇番

産兒制限と器具に就て……

勞働診療所長
東京市會議員
ドクトル 馬島僴氏談

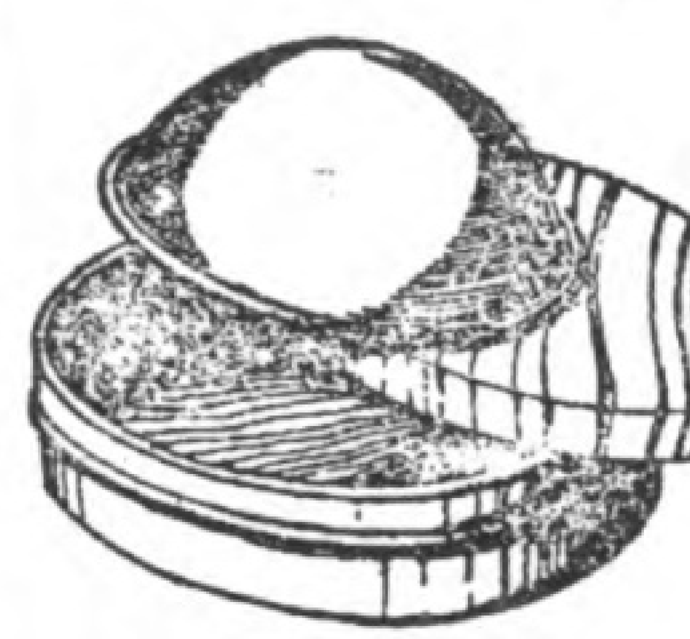
婦人用の避妊用具は、實に多種多樣であるが、嚴密な醫學上の立場から見て、その多くは甚だ效果の疑はしいものである。たゞイギリスで專ら用ひられて居る子宮キヤツプと、オランダでひろく認められて居る膣奥閉塞膜（ペツサリー）の二種は、現今醫學が教へる範圍での最も理想に近いものと云へる。

しかし私の經驗で、イギリス型は一々醫師が取扱はないと屢々失敗の虞れがある。これに反してオランダ型は、素人が自ら極めて簡單に用ひられて、未だ失敗の例も見出さない。私は主としてオランダ型を採用して來た。

だが輸入品は、とかく高價なので、日本に於てよきオランダ式のものを製作し度いと考へ、小柳ゴム製作所に依頼して特に私の長い間の經驗から得た考案を注意深く加へて製作したのが卽ち今回發賣される本品である。

滿足なるこの製品を得るまでには可なりの長い時日を費した。醫師としての責任上私はたとへどんな小さな缺點でも容認する事は出來なかつた。私は樣々な製作過程によつて製作された試作品を數十回に亙つて一々嚴密な實驗をして見ねばならなかつた。此の間小柳氏の驚く可き熱心さとうむ事なき努力とは、私のうるさい註文や注意を一々充分に研究し工夫し次から次と新しい試作品を提供してくれた。か樣にして遂に今日發賣される物の樣な極めて滿足な製品に迄到達したのであつた。

ゴムの性質は勿論、ワクの太さ、彈力の度合、その取り付け方など主要部分の出來上りは外國品に優るとも斷じて劣るものでない事は、私が證明し得る。敢て私から一般大衆におすゝめする次第である。



（馬島氏ダッチペッサリー）

馬島式ダッチペッサリーの臨床效果

愛兒女性協會
女醫 尾崎豐子氏談

專門的に、毎日澤山の御婦人達の避妊に關する御相談を受けてゐますが、日本婦人が、在來の習慣的又は風習的な道德觀から、失禮ではございますが性問題に對してあまりにも隱蔽的であり無智であります爲、とんだ操作によつて恐ろしい危險を招かれた方が隨分多い樣でございます。

で私は、"誰もが手輕に何等の危險なく、完全に目的を達し得られる物"として誰方にも先づ馬島氏「ダッチペッサリー」をお勸めします。

生理的にも心理的にも害に申分がなくて、今日迄まだ一度も、不都合や不滿足や失敗やのお小言を受けた事がありません。

外國品に優る小柳製の改良型が出來ましたから、日本人にピツタリと合ふ理想品がお安く手に入る樣になりまして大變喜んでをります。

教育週報社長 爲藤五郎先生著

▲四六判箱入
▲三百餘頁

▲定價二圓五十錢
▲送料十六錢

(最新刊)

現代農村の教育

教育村神興の眞髓

一、惱める現代農村指導者への光明
二、實例引用農村新教育方法懇切
三、擧村一致教育村の教育眞髓詳解

現代農村は行詰り青年男女其の方途に惱む本書は之が新指針書として最良。飜譯まがひの空論に非ず、專ら實例を以て農村に於ける最良の教育を詳說。國定教科書のモデル福岡縣神興村を親しく縱横より視て其の眞相を披瀝し盡さる。

目次の一班

—小目次の一例—

東京市神田區錦町三丁目九 東洋圖書株式合資會社發行 振替東京一〇三七番


ひろし
品質日本一
上
ヤマサ醬油
宮内省御用達
ヤマサ醬油株式會社

大正十三年十一月二十二日第三種便物認可
昭和五年八月十八日印刷納本
昭和五年九月一日發行（毎月一回・一日發行）
婦人運動 第八卷 第七號
定價廿錢

